

飛鳥古京から明日香へ

－飛鳥地域における歴史的風土の形成過程－

相原 嘉之

I. はじめに

昭和41年「古都保存法」が制定され、京都・奈良・鎌倉などと共に、明日香村は古都に指定された。翌昭和42年には「歴史的風土保存地区」の指定、44年には「歴史的風土特別保存地区」の指定と国による保存策が図られ、土地の利用規制によって古都の歴史的風土を保存しようと動き出した。さらに昭和45年には「飛鳥地方における歴史的風土及び文化財の保存等に関する方策について」の閣議決定が行われ、歴史的な文化財や自然景観の保存と同時に、総合的な計画のもとに必要な環境・施設を整備する必要があると答申された。そして、昭和55年には「明日香村における歴史的風土の保存及び生活環境の整備等に関する特別措置法」を公布・施行した。

これらの法整備と住民生活の充実によって、今日まで明日香の景観が守られてきたことは、隣接する市町村と比較すると一目瞭然である。

この飛鳥の地は7世紀の飛鳥時代、日本の首都であり、多くの宮殿・官衙・寺院・古墳が作られ、飛鳥の盆地の中は、まさしく建物が林立する景観であったことが発掘調査の結果判明してきた（相原2003）。しかし、この景観も一時期に突如としてなくなったものではなく、飛鳥時代の100年間の積み重ねとして徐々に充実していった結果といえる（相原1993・阿部1997・林部2001）。

しかし、次の奈良時代になると一部の離宮を除いて宮は廃絶し、いくつかの寺院がその往事を偲ばせていくにすぎない。この寺々も平安時代の末期から鎌倉時代の初めには落雷などによって伽藍が焼失、古都としての面影すらなくしてしまうことが、記録からわかる。そして現在、飛鳥の地は水田景観が広がり、集落が点在、山々には緑の里山景観の風景に至ったのである。その意味で、現在の風景は飛鳥時代の歴史的景観を指すのではなく、まさに飛鳥時代に形成され、その後1300年の歴史の積み重ねによって形成された「歴史的風土」と呼ばれている。

飛鳥地域が平城京遷都後、今日に至るまでどのような変遷をしていたかは、極めて少数の古記録しかなく、よくわかっていない。その中でも寺院については、現在も法灯を伝える寺があり、時々の記録にも現れるため、断片的な記載ではあるが、その変遷の一端を垣間見ることができる。しかし、例えば寺域の縮小の変化や伽藍の増減などは、そこから読みとれない。ましてや宮跡やその他の施設についての記録は皆無に等しい。そこで、これまでに古記録に現われる記載をも参考にするものの、ここでは考古学的な成果を用いながら、各遺跡の1300年間の変遷を復元、そこから読みとれる動向を明らかにしていきたい。これはとりもなおさず、飛鳥地域における歴史的風土の形成過程を跡づけるものにほかならない。

Ⅱ. 飛鳥時代以降を対象とした研究

飛鳥地域において、飛鳥時代以降の歴史や遺跡を対象とした研究は少ない。発掘調査においても飛鳥時代の遺構を中心とした調査がなされており、その上層遺構については意識的な調査がなされず、調査されても簡単な報告がなされるだけである。

このような中、林部均氏は飛鳥宮の宮殿遺構の解体過程を検証した。林部氏は飛鳥宮の発掘調査において解明された建物の解体の方法について検証しており（林部2006）、さらに出土土器から宮殿の廃絶時期が内郭と外郭とでわずかな時期差があり、さらに外郭施設は奈良時代中頃まで維持管理されているなど、廃絶の過程を検討している（林部1999）。

和田萃氏は、亀形石槽・嶋宮、そして飛鳥京跡苑池や方形池などが飛鳥時代以降、平安時代まで維持管理されていた調査事例をあげ、特に、奈良時代には称徳天皇が天平神護元（765）年に、小治田宮に滞在し、小原・長岡・飛鳥川に臨んだという記事を、これらの遺跡に対応させている（和田2001）。また、小澤毅氏も先の長岡巡検に際して亀形石槽を見たと言及（小澤2002）。さらに西口壽生氏は奈良時代の坂田寺の調査成果を紹介する中で、同記事の途中で坂田寺にも立ち寄った可能性をほのめかしている（西口2002）。

飛鳥時代に創建された寺院の、奈良時代の様相について紹介したのは花谷浩氏である。花谷氏は山田寺と檜隈寺の発掘調査で得られた瓦の成果を文献記録と対応させながら、当時の様子を生々しく記録する（花谷2003）。

飛鳥を都市という観点からみ、その都市的景観・機能を寺院の廃絶を通して検討したのは網干善教氏である。網干氏は飛鳥における都市的景観のシンボルでもあった寺院の、特に塔の廃絶に注目し、発掘成果や古記録から、平安時代末から鎌倉時代初頭に多くの寺々の塔が焼失することを指摘し、以降、再建はままたまなかった。ここに飛鳥の都市としての面影は消滅し、中世的景観に変化したとする（網干1974・2004）。

和田萃氏は菅笠日記などから、本居宣長の足跡をたどり、その行程から近世の街道（道路）を導き出した。これを基にさらに飛鳥時代の道路網について推測しているが（和田1988）、このような近世の地誌や日記などから、当時の状況を検討することは網干善教・亀田博氏もおこなっている。そこには現在とはまた異なる景観が浮かび上がり、当時の人々が、石造物などの遺物をどのように理解していたのかがわかる（網干1984・亀田1995）。

なお、藤原宮内及びその周辺における藤原宮廃都後の動向について記したものには、木下正史・安田龍太郎両氏の論考がある。木下氏は藤原宮の廃都・遷都に伴う施設の解体状況から、奈良時代の香山正倉、平安時代の宮所庄に至る経過を遺跡から導いており（木下1992）、安田氏はさらに増加する発掘成果を利用し、奈良から中世までを同様の視点で展覧している。特に、中世期の集落が現在の集落の原型になると指摘する（安田2005a・2005b）。

これら飛鳥時代以降の歴史を発掘調査の成果と古記録から、総合的に展覧したのが飛鳥資料館の平成10年春期特別展「それからの飛鳥」展である。これまでの発掘成果から、平城宮への遷都に伴う藤原宮の解体過程や、その後の飛鳥・藤原地域の奈良時代の様子、平安時代の藤原京や飛鳥地域の寺院の動向、絵図からみた中近世の飛鳥など、総括的に展示を行った（飛鳥資料館1998）。また、その後の飛鳥の歴史を詳細かつ総合的に記述したものに『明日香村史』『続明日香村史』がある（泉谷1974・永島1974・平井1974・谷山2006・吉川2006）。

Ⅲ. 遺跡にみる各地域の動向

A. 飛鳥の宮殿及び離宮

飛鳥宮

飛鳥宮の範囲については明確ではない。これまでに発掘調査で確認できているのは、東面大垣だけで、岡寺山の西裾を南北に通る村道とほぼ重複する。西限については確認されていないが、南東から北西に流れている飛鳥川まで、同様に南限は遺跡の広がりや地形からみて、唯称寺川までと考えられる。これに対して、北限はまったく手がかりがなく、ここでは飛鳥寺との間に想定し、今回は飛鳥寺の南までの範囲を対象とする。現在この地域は水田景観が広がっており、明日香村役場のある東西道路沿いと、ここから内郭東塀に沿って住宅がみられる。また、エビノコ郭地域についてはすでに住宅が密集しており、東面大垣と重複する村道に沿っても住宅がみられる。さらに新しい住宅地としては内郭西側の段丘下の飛鳥川に沿って開発が進んでいる。

飛鳥宮はこれまでの調査で、ほぼ同じ場所で宮殿遺構を3時期分確認している。このうち上層にあたるⅢ期はさらに2小期に区分でき、Ⅲa期を斉明天皇の後飛鳥岡本宮、Ⅲb期が天武天皇の飛鳥浄御原宮であることが確実視されている。さらに下層に位置する遺構はⅠ期を舒明天皇の岡本宮、Ⅱ期を皇極天皇の飛鳥板蓋宮である可能性が指摘されている（小澤1988・林部1998）。この宮殿の内郭及びエビノコ郭の廃絶は、出土土器などから飛鳥Ⅳであることが判明しており、藤原宮への遷都とともに、宮殿中枢部はすみやかに解体されたことがわかっている。また外郭内の施設は飛鳥Ⅳ～Ⅴの段階（藤原京期）で廃絶、中枢部よりもわずかに遅れて廃絶している。さらに北方や東方の石組溝の一部は飛鳥Ⅳから埋没が始まり、完全に埋没するのは平城Ⅱ～Ⅲ段階、つまり、奈良時代中頃まで下ることがわかるが、宮殿内に確実な奈良時代の遺構は確認されていない。林部均氏によると藤原宮遷都後も奈良時代中頃までは、宮跡として厳重に管理されていたとされる（林部2001）。奈良時代後半にはこれらの石組溝も廃絶するものの、依然として活発な開発は次の平安時代においてもみられず、13世紀になって東外郭の第115次調査区で小溝群を確認している（榎考研1990）。飛鳥宮の小溝群の成立時期については明確ではないが、この頃には確実に広がっているようである。さらに、この小溝を廃して建てられる小規模な建物が13世紀以降にみられるが、単発的で、やがて水田・畑地景観へと復したと考えられる。一方、内郭に接する西側の第26次調査地では中世～近世の石組井戸が1基検出されている（榎考研1972）。

飛鳥京跡苑池

飛鳥宮内郭の北西の段丘下に位置する、飛鳥宮に附属する苑池遺構である。南池と北池、そこから伸びる水路によって構成されている。苑池の築成時期については特定する決め手に欠けるが、飛鳥Ⅲ～Ⅳの7世紀後半には池の一部で改修がみられ、この頃にはすでに苑池が存在しており、飛鳥宮Ⅲa期に作られた可能性が高い。その後、池の埋没は出土土器からみると、9世紀から始まるようで、奈良時代には維持管理が徹底していたと考えられる。ここで注目されるのは墨書土器の中に「川原寺」「岡寺」と記されたものがあることである。川原寺は飛鳥川を挟んで隣接するが、岡寺は東へ1km離れている。平安時代に両寺院と苑池との関係が注目できる。9世紀に維持管理がなされなくなると、周辺的环境は水草と広葉樹が生い茂り、埋没の過程でこれらの樹木が伐採され、池内に投棄されていることも判明している。そして、鎌倉時代までは窪地として残っていたものの、この頃に完全に埋没した（榎考研2002b）。

小墾田宮

小墾田宮は推古天皇の宮殿として、推古11（603）年に造営された宮殿である。その後、皇極元（642）年や斉明元（655）年にも記録に現われ、さらに、奈良時代の天平宝字4（760）年にも淳仁天皇が行幸した記事があることから、奈良時代まで離宮として存続していたものと考えられる。宮跡については従来、明日香村豊浦周辺に推定されていた（奈文研1976）が、昭和62年に雷丘東方遺跡で奈良時代の井戸から「小治田宮」と記された墨書土器が大量に出土したことによって、奈良時代の小治田宮は雷丘の周辺（雷丘東方遺跡）にほぼ確定した（明日香村1988）。さらに遡って推古天皇の小墾田宮についても、同地にあったことが有力視されている。

雷丘東方遺跡は雷丘並びにその東側一帯に位置する遺跡であるが、石神遺跡の北西に隣接している。飛鳥時代の遺構には、7世紀前半の苑池と考えられる池と斜行溝がある。池はわずかに、北側の護岸の一部を確認したに留まるが、石を貼った遺構である。溝は南東から北西へと流れる堀割状の遺構で、水の流れた形跡がみられない（奈文研1994）。7世紀中頃には雷丘と上山の間で苑池と石敷遺構を検出している（明日香村1996）。いずれも一部分の確認で、短期間で遺構は廃絶すると考えられる。7世紀後半には雷丘の東側で、9間以上の南北棟を含む建物群や塀・溝がある（奈文研1994）。その後、奈良時代になると、しばらく史料には現れず、遺構も確認されていない。記録に現れるのは天平宝字4年（760）である。淳仁天皇は播磨・備前・備中・讃岐からの3000斛の糶を収めさせ、8月18日から翌年正月11日までの5ヶ月間、小治田宮に滞在した。これに対応する遺構が、天平末年（748）から天平宝字末年（764）頃の建物・礎石建物・溝・井戸である（奈文研1980）。特に、礎石建物は先の記録にある品々を収納するのに相応しい倉庫で、これが複数あったことも興味深い。さらに井戸枠材は年輪年代測定法によって758年+ α 、つまり760年頃に伐採された材で作られていることが判明しており、まさに淳仁天皇の行幸のために作られた井戸と言えよう（相原・光谷2002）。その後も天平神護元年（765）に、称徳天皇が紀伊国へ行幸する途中、小治田宮で二泊したことが記されており、遺構の上からも天平宝字末年以降の建物や溝がある。先の井戸はこの頃にも存続しており、極めて良好に維持管理されていたことが遺物の出土量の少なさからわかる。これを最後に記録から小治田宮の記載はみられなくなり、その後の状況については明らかではない。井戸の底からは8世紀末から9世紀初頭には「小治田宮」と記された墨書土器が大量に投棄され、埋没が始まるが、9世紀前半にかけてはまだ使用されていたと考えられる。このころの遺構には建物・溝がある。しかし、9世紀後半には井戸は完全に埋められており、小治田宮も終焉したと考えられる（相原1999a）。

嶋宮

嶋宮と推定されている島庄遺跡は飛鳥川右岸の段丘上に位置する。北を唯称寺川、西を飛鳥川、南を冬野川に画され、東は石舞台古墳をも含む範囲となる。また、飛鳥川を隔てた左岸にも東橋遺跡があり、島庄遺跡に含まれる可能性がある。現在は北部を中心に集落が広がっており、西部の飛鳥川沿いや東部の石舞台古墳周辺には水田景観が良好に残されていた。これまでの調査では飛鳥時代を中心に、縄文時代から中世までの遺構が確認されている。遺構は方形池を中心に、その周囲に広がる。方形池は7世紀初頭に造営されたと考えられており、その後、平安時代末から鎌倉時代初頭には完全に埋没する（奈良県1974）。この方形池と同時期の大型建物や塀が南部で確認されており、遺跡の中核に近い部分であったことがわかる（明日香村2005）。立地や遺構の状況からは蘇我馬子の飛鳥川の傍の家の一画に該当する可能性があり、

この頃にはじまる石舞台古墳の築造とも無縁ではなかろう。7世紀中頃になると、方形池の南側で建物を建替えており、やや小さな建物となる。また、池の北側では川と小池などが作られ、苑池的な景観が形成されている（檀考研2002）。また、この川を埋め戻した後にも建物が建てられていた。この頃、史料では吉備姫王や糠手姫皇女、さらには中大兄皇子もこのあたりに居住していた可能性があり、一連の遺構群との関連は注目される。7世紀後半になると、遺構は正方位を向けて建てられており、方形池の北と南で建物がみられる。これは草壁皇子の嶋宮の造営にあたっての可能性が高い。史料では奈良時代になると、大規模な御田を所有していたことがわかるが、発掘調査ではこの頃の遺構を検出していない。あるいは遺構がみられないのは、水田が広がっていたためなのかもしれない。11世紀には一部で木棺墓が作られること（奈良県1974）から、嶋宮の機能は完全に喪失していたと考えられる。また、方形池も鎌倉時代初頭には完全に埋没しており、代わって、島庄遺跡全域で中世の建物や井戸などがみられる（明日香村2006a）。しかし、これ以降は、顕著な遺構は確認されず、一部を除いて現在の景観が水田風景を呈していることから、水田・畑地になったものと考えられる。

B. 宮外官衙及び関連施設

石神・水落遺跡

現在は水田が広がっており、遺跡西辺の飛鳥川沿いと水落遺跡東方の一部に建物が建っていることを除いては、田園風景が良好に保たれている。この地域は7世紀前半には開発が始まっており、7世紀後半にその最盛期を迎える。石神遺跡ではA期と呼ばれる斉明朝には特異な配置の建物群が建てられ、石人像や須弥山石と呼ばれる噴水石造物が並べられていた。この地域は「飛鳥寺の西櫺の広場」として記録にみられ、斉明朝の建物群は迎賓館としての機能が推定されている。また、天武朝・藤原宮期になると、建物群がそれぞれ一新され、飛鳥浄御原宮や藤原宮の官衙区画が形成されている。一方、水落遺跡では斉明朝に漏刻遺構が建てられる（奈文研1995a）が、その前段階には石神遺跡と類似の建物群も想定されている（奈文研2000）。つまり、迎賓館は当初、水落遺跡側にあったが、斉明朝に石神遺跡側に移転、これと合わせて水落遺跡には漏刻が建てられていた。

これらの遺跡も奈良時代になると、撤去、廃絶する。石神遺跡の北部の一部で奈良時代まで下ると考えられている建物があるが、顕著な施設はみられない。7世紀までの景観と比較すると、隔絶した差がある。次の平安時代には、石神遺跡の南半の一部と水落遺跡地区で数棟の建物・堀・井戸・溝・土坑がみられる。しかし、石神遺跡地区北半では小溝群がみられ、この頃から水田・畑地になっていた可能性がある。ここで注目されるのは水落遺跡第9次調査区の土器棺である（奈文研1997）。しかし、これらの遺構も鎌倉時代になると、顕著な遺構はなく、小溝群が掘られているだけである。室町時代に石神遺跡第2次調査地で室町時代の井戸、14世紀の建物・堀などがみられるだけである。この頃になると遺跡全体に小溝群が掘削されており、ほぼ全面にわたって水田・畑地景観になっていたと考えられる。

飛鳥池工房遺跡

飛鳥池遺跡は飛鳥寺の南東の二つの尾根に挟まれた谷筋に位置する。平成13年に県立万葉文化館が建設されたが、平成になるまでは近世のため池「飛鳥池」があった。

遺跡は7世紀中頃から工房として操業が始まったが、活発に操業が継続するのは7世紀後半から8世紀初頭である。ここでは金・銀・銅・鉄・ガラス・玉・漆製品などをはじめ、我が国

初の鑄造貨幣である富本銭を生産していた。遺跡は工房地区である南側と管理地区である北側に分かれている（花谷1999）。また、遺跡の東側では幅10m以上にもおよぶ河川（運河）が確認されており、斉明朝の狂心渠ではないかと推測されている。

奈良時代になるとその生産活動は急激に衰え、平城京遷都と共に、官営工房としての飛鳥池工房の役割は終わった。平安時代になって数基の井戸がみられる（奈文研1998）ことから、何らかの生活が営まれていたと考えられるが、あるいは飛鳥寺の隣接地であることから、これとの関わりがあるのかもしれない。しかし、平安時代も後半になると、飛鳥池東方遺跡の運河も埋没し（奈文研1999）、小規模な水路として現在まで引き継がれていく。同時にこの頃には水田畦が検出されていることから、水田景観が広がり始めていたことがわかる（奈文研1998）。

鎌倉・室町時代には顕著な遺構は確認できず、水田景観が広がっていたのであろう。このような中、江戸時代になると、飛鳥池工房遺跡の中で、梵鐘鑄造遺構が作られた。これは飛鳥寺の梵鐘で、延享2年に鑄造した梵鐘である（奈文研1998）。その後、近世に二つの尾根を塞ぐ堤が構築され、ため池「飛鳥池」が形成される。ここで溜められた水が下流域の水田を潤していたのである。

酒船石遺跡

飛鳥東方丘陵上に謎の石造物と呼ばれる「酒船石」が座しており、ここを酒船石遺跡と呼んでいる。遺跡は大きく4地域に区分が可能で、酒船石のある丘陵部、北側の亀形石槽のある北部地区、東側の運河等が確認されている東部地区、西側の平坦面に位置する西部地区と分かれる。丘陵部及び北部地区が天皇祭祀に関わる施設で、酒船石遺跡の本体にあたる。一方、東部地区は狂心渠にかかわる運河が下流で見付かっており、基本的に飛鳥池東方遺跡と変わりが無い。そして、西部地域は、酒船石遺跡よりも西側に展開する飛鳥宮の宮外官衙と推定される遺構群である。よってここではまず、丘陵部及び北部地区の変遷をみ、続いて西部地区の変遷を追うことにする（明日香村2006b）。

丘陵部及び北部地域では、遺跡の造営が7世紀中頃の斉明2（656）年の「宮の東の山の石垣」に該当し、丘陵部の砂岩石垣ならびに下段の石列群、そして酒船石もこの時に造営されたと考えられる。また、北部地域のⅠ期遺構も丘陵上と同時に造営が進められた。7世紀後半の天武朝前半に北部地域では大規模な改修（Ⅱ期）がなされる。そして天武13年、飛鳥地域に大規模な地震が起り、丘陵上の砂岩石垣が倒壊する。これをもって丘陵上の遺構群の活動はほぼ停止し、砂岩切石も一部の石材を転用するために持ち去られる。北部地域では7世紀末段階で部分的な改修（Ⅲ期）を行うが、丘陵上の石垣倒壊と関連するのかもしれない。

奈良時代には顕著な遺構は確認できず、当該時期の遺物の出土も少ない。石造物や石敷が次の平安時代にも露出していることから、この時期には積極的な活用はなされていないが、適切に維持管理がなされていたのであろう。なお、称徳天皇は天平神護元（765）年に行幸には、小治田宮から小原・長岡をめぐって飛鳥川を臨むとあり、「長岡」とは飛鳥の東方丘陵を指しており、この時に、酒船石遺跡の亀形石槽に立ち寄った可能性もある。

平安時代の9世紀中頃及び後半には、湧水施設は埋没しており、代わりに曲物を井戸枠として、亀形石槽に流していたようであるが、当初の性格はすでに喪失していると思われる。そして10世紀初頭には北部地域も埋没し、遺跡は終焉を迎える。その後の歴史を物語る発掘成果はないが、ある段階で水田となったようである。

一方、西部地域の変遷をみると、この地域では幅2.5mにも及ぶ石組溝が南北に設置されて

おり、幅員をかえながらも平安時代まで続いていく、この溝の延長は飛鳥寺南方遺跡や飛鳥京跡第150次調査でも確認されている（榎考研2003）。石組溝の築造時期は明確ではないが、7世紀中頃まで遡る可能性がある。その後、7世紀後半には東側石を積み直し、幅を狭めながらも同じ場所に設置する。これらの溝の東側には建物や石敷がみられ、さらに木簡も東側から投棄されたことがわかっているため、この地域に飛鳥浄御原宮に関わる施設（宮外官衙）があった可能性が高い（相原2003）。

奈良時代には一部バイパス的な石組水路を設置するものの、前段階の石組溝を踏襲して流されており霊亀2（716）年銘の木簡も出土している。溝は平安時代まで使用されていたが、飛鳥京跡第150次の成果をみると、平安時代末から鎌倉時代初頭には水田になっていたことがわかる（榎考研2003）。

古宮遺跡

古宮遺跡は飛鳥川左岸の扇状地に位置し、ここから北西へと傾斜をしながらも広大な平野部が続く（奈文研1974・1976）。南に隣接して東西の県道が通過しているが、これは古代山田道を踏襲したものと考えられている。現在は遺跡東側に豊浦の集落が密集しており、西側の橿原市和田町も住宅開発が徐々に進んできているが、まだ、水田地域が多く見られる。また、遺跡の中心には古宮土壇があり、ヨノミ木が一本生えている。

遺跡の中心は先の古宮土壇で、従来推古天皇の小墾田宮の有力な推定地であったが、雷丘東方遺跡で「小治田宮」墨書土器が出土して以来、蘇我氏関係の邸宅遺跡と考えられるようになってきた。

飛鳥時代の遺跡は大きく2時期あり、7世紀前半には小池と石組溝を中心に、方位の振れた建物群がある。これらは庭園遺跡との位置づけがなされている。7世紀後半になると、前段階の施設は廃絶し、方位に合わせ建物群が建並ぶ。

8世紀初頭には整地を施し、建物が建てられるが、長くは続かない。平安時代には古宮土壇が作られ、この土壇を囲むように12世紀末の溝が巡っている。

その後、中世には小溝や井戸・土坑がみられるが、他に顕著な以降は見られなくなる（奈文研1976）。

小原遺跡群

飛鳥東方丘陵及びその谷部に位置する当地は、飛鳥時代の遺構が比較的多く見つかっている地域である。現在は万葉文化館とその関連道路などの建設によって、その景観は大きく変貌を遂げてきているが、それまでは田園風景の残る地域であった。特に高家から、八釣そして甘檜丘、さらに背後に二上山を背景とする写真は著名である。

飛鳥時代には飛鳥小谷遺跡・小原宮ノウシロ遺跡・東山マキド遺跡など、7世紀代の建物群が検出されており、同時代の邸宅等の施設が営まれた場所とされている（明日香村1997・1991・1992）。これらは基本的に、丘陵上の立地の良いところに集中する。さらに、『藤原家伝』によれば、藤原氏の邸宅があった場所ともされており重要である。

次の奈良時代になると、土器の散布はみられるものの確実な遺構はみられなくなる。ただし、『続日本紀』天平神護元（765）年に称徳天皇が紀伊国行幸の途中に、小治田宮に滞在し、大原・長岡・飛鳥川を見たことあり、当地が「長岡」に含まれることは興味深い。

平安時代になっても遺構は見られないが、『興福寺雑役免等田畠坪付帳』によると、延久2（1070）年にはこの地が興福寺領の大原荘であったことがわかる。このことは藤原氏とゆかり

飛 鳥 宮

年 代	古 記 録	発 掘 成 果
舒 明 2 年 (630) 8 年 (636) 皇 極 2 年 (643) 斉 明 元 年 (655) 2 年 (656)	飛鳥岡本宮に遷る 飛鳥岡本宮が火災 飛鳥板蓋宮に遷る 後飛鳥岡本宮が火災 後飛鳥岡本宮に遷る	飛鳥宮Ⅰ期遺構 (7世紀前半) 飛鳥宮Ⅱ期遺構 (7世紀中頃) 飛鳥宮Ⅲ-A期遺構 (7世紀後半) 苑池遺構の造営 (7世紀後半) 飛鳥宮Ⅲ-B期遺構 (7世紀後半) 苑池遺構の改修 (7世紀後半)
天 武 元 年 (672) 14 年 (685) 朱 鳥 元 年 (686) 持 統 5 年 (691)	岡本宮の南に宮室を造る 白錦後苑 宮号を飛鳥浄御原宮とする 御苑	飛鳥宮Ⅲ-B期内郭の廃絶 (7世紀末) 飛鳥宮Ⅲ-B期外郭内の廃絶 (7世紀末～8世紀初頭) 飛鳥宮外郭の廃絶 (8世紀中頃) 苑池の埋没が始まる (9世紀) 苑池が埋没し、窪地になる (12世紀) 小溝群 (13世紀)

小 墾 田 宮

年 代	古 記 録	発 掘 成 果
推 古 11 年 (603) 皇 極 元 年 (642)	小墾田宮に遷る 小墾田宮に遷る	苑池遺構や斜行する堀割 (7世紀初頭) 雷内畑遺跡で苑池遺構 (7世紀中頃)
大 化 5 年 (649) 斉 明 元 年 (655) 天 武 元 年 (672)	蘇我興志が宮を焼こうとする 小墾田宮を瓦葺に計画する 小墾田の兵庫	掘立柱建物・堀・溝 (7世紀後半) 石神遺跡で鉄鏝 (7世紀末の整地層)
天平宝字 4 年 (760) 天平神護元 年 (765)	播磨・備前・備中・讃岐から楠を取める 淳仁天皇が5ヶ月間、小治田宮に滞在 称徳天皇、紀伊国行幸の途中に二泊滞在 雷丘が小治田宮の北にあると記す [日本霊異記]	礎石建物・掘立柱建物・堀・溝・井戸 (井戸枠の伐採年代758年+α) 「小治田宮」墨書土器出土 (8世紀末) 井戸が埋没 (9世紀中頃)

嶋 宮

年 代	古 記 録	発 掘 成 果
推古34年(626)	飛鳥川の傍に嶋大臣の家をつくる	方形池造営(7世紀初頭) 大型建物群・塀(7世紀前半) 曲溝・川・小池・建物(7世紀第中頃)
皇極2年(643) 4年(645) 大化2年(646)	吉備嶋皇祖母(吉備姫王)死去 中大兄皇子宮を馬子家の隣接地につくる 吉備嶋皇祖母の貸稲を廃止	建物群・塀(7世紀中頃)
天智3年(664) 10年(671) 天武元年(672) 5年(676)	嶋皇祖母(糠手姫皇女)死去 大海人皇子、嶋宮に立ち寄る 大海人皇子、嶋宮に入る 嶋宮で大射の後の宴を行う	正方位の建物群(7世紀後半)
持統10年(681) 統4年(690)	赤亀を嶋宮の池に放す 京と畿内の高齢者に嶋宮の稻を与える	
天平5年(733)	皇后宮職によって車で藁を奈良に運ぶ [造仏所作物書]	
天平勝宝2年(750)	嶋宮の奴婢83人を東大寺に施入 [東大寺奴婢]	
天平8年(756)	嶋宮の御田11町を橘寺に寄進する [護国寺本諸寺縁起集]	木棺墓(11世紀) 方形池が埋没する(12世紀後半)
		ほぼ全域で建物・井戸・溝(中世) 東橘遺跡では耕作溝群(12~13世紀)
		東橘遺跡では耕作溝群(15世紀)
		東橘遺跡では耕作溝群(17世紀)

酒 船 石 遺 跡

年 代	古 記 録	発 掘 成 果
斉明2年(656)	宮の東の山に石を累ねて垣とす	遺跡の造営(7世紀中頃) 北部地域の大改修(7世紀後半)
天武4年(675) 13年(684)	宮の東の岳に登る 白鳳南海地震	石垣の倒壊(7世紀後半) 北部地域の改修(7世紀末)
持統7年(693)	多武峯行幸	
10年(696) 大和2年(702)	二槻宮行幸 大和国が両槻宮を修繕	
天平神護元年(765)	小原・長岡を巡る	北部地域の改修(9世紀中頃) 北部地域の改修(9世紀後半) 北部地域の遺構埋没(10世紀初頭)

のあったことから興福寺との関係が生まれたのであろう。おそらく、奈良時代以降12世紀までの遺物が小原の谷筋から出土しないことは大原荘と関係するのかもしれない(吉川2001)。一方、小原宮ノウシロ遺跡や飛鳥坐神社の東側では12~13世紀の建物群が見つかっており(奈良県1972)、大原荘の管理施設が丘陵上にあったのかもしれない。そして、小原遺跡では12世紀までであった谷筋の流路が付け替えられ、13世紀には水田になったことが判明している。現在見られる景観は13世紀以降に形成されたことがわかる(檀考研2000)。

西橋遺跡

西橋遺跡は橋寺旧境内地の西側に広がる遺跡である。東西方向の尾根が北と南にあり、西に開くコ字形の地形をしており、挟まれた間は谷となっている。北の尾根上には東西に小道があり、これが飛鳥時代から近世にかけての古道を踏襲しており、その北には亀石が坐している。現在はこの小道沿いに住宅が建ち並びはじめたが、それまでは水田景観が広がっていた。

飛鳥時代には7世紀後半の木簡が土器や木製品と共に谷に投棄されているのが確認されており、近隣から投棄されたと考えられている。また、丘陵上では削平が大きいのが、飛鳥時代の道路跡や建物群の柱穴が数多く検出されている。

奈良時代には確実な遺構は確認できていないが、土器が一定量出土することから、本来は存在していた可能性が高い。さらに平安時代になると、黒色土器の出土する井戸が確認されている。鎌倉から室町時代には瓦器を伴う建物や井戸があり、多くの建物群が建てられていたことがわかるが、この時期を境に以降の遺構は確認できない。おそらく、室町時代以降に水田景観へと変貌したのであろう(明日香村1993)。

甘檜丘東麓遺跡

甘檜丘東麓遺跡は甘檜丘の南東裾に位置する遺跡である。現在は国営飛鳥歴史公園として整備されているが、昭和40年代まではミカン山であった。『日本書紀』によれば、甘檜丘には蘇我蝦夷・入鹿の邸宅があったとされ、乙巳の変に際して、焼失したと記されている。

飛鳥時代の遺構には7世紀中頃の焼土層と7世紀後半の整地土、7世紀代の建物6棟、堀3条がある。建物には2時期の変遷があり、あるいは整地土と対応するのかもしれない。この中で7世紀中頃の焼土層には焼けた建築部材や焼土があり、出土した土器から640年代のものと推定できる(奈文研1995b)。これは記録との対比では、乙巳の変の頃となり興味深い。

8世紀には顕著な遺構は確認できないが、平安時代に2棟の建物が確認されており、再び屋敷地として利用されていたことがわかる。その後顕著な遺構はなく、近世には棚田となっていたようである(奈文研2006a)。

平吉遺跡

平吉遺跡は甘檜丘北側斜面に位置する遺跡である。現在国営公園の芝生広場として整備されているが、公園整備前までは水田及び山林であった。

検出した遺構は古墳時代から近世にまで及ぶが、まず飛鳥時代では7世紀前半の豊浦寺に関わる瓦が大量に出土している。ただしこの瓦に関わる遺構は確認できていない。7世紀の後半になると、掘立柱建物4棟・堀4条・炉跡3基・石列・集石遺構がある。その後、8世紀~9世紀初頭の遺構として掘立柱建物2棟・堀1条・井戸1基・池状遺構などがある。9世紀前半にはこれらの建物群も廃絶しており、木棺墓が1基つくられ、当地は墓域になっていたと考えられる。鎌倉時代には土坑があるだけで、顕著な遺構の展開はみられない。さらに近世には石垣が造られ、段々畠の水田になったものと思われる(奈文研1978)。

C. 古代寺院

飛鳥寺（法興寺・元興寺・建通寺）

飛鳥川の右岸に位置する飛鳥寺は、当時の境内地は南北293m、東西215～260mにも及ぶ。現在は旧寺域の北2/3が集落となっており、寺域を東西と、それに接続する南北の幹線道路がT形に貫通している。南1/3は水田が広がっており、遺跡は水田下に眠っている。

飛鳥寺の発願は用明2（587）年に蘇我馬子が発願したことにはじまる。その後、崇峻元（588）年には百濟から仏舎利と僧、寺工・路盤博士・瓦博士・画工が派遣され、飛鳥衣縫造の祖樹葉の家を壊して、造営が開始される。このことは6世紀後半の遺構を埋め、飛鳥寺造営の整地層が広がることや、南東にある飛鳥寺瓦窯の丘陵の先端が削り取られていることから、造成の規模が伺われる。また、崇峻3（590）年には寺の木材を山から切り出しており。崇峻5（592）年には仏堂（金堂）と歩廊（回廊）を起工した。推古元（593）年には仏舎利を塔心礎に納め、心柱を立てる儀式を行っている。この時に納められていた舎利と埋納物が昭和32年の発掘調査で出土している。同4（596）年には塔が完成した。飛鳥寺の創建瓦には、文様と製作技法からみて「星組」と「花組」と呼ばれる2系統の工人集団がいたことがわかり、先の瓦博士の一端を伺わせる。推古13（605）年には銅・繡丈六仏が鞍作止利を造仏工として発願され、翌14（606）年には「飛鳥大仏」として著名な仏が完成している。このように飛鳥寺の造営は蘇我氏の強大な財政力に支えられ、僅か20年で大規模な伽藍が完成した。

その後、飛鳥寺は歴史の重要な舞台に必ず現れる場所として重要な地位を占めていた。皇極3（644）年には、法興寺の西の槻の木の下で蹴鞠の時に、中大兄皇子と中臣鎌子の出会いの場となっており、後の乙巳の変にあたっては、飛鳥寺を城として備えとあり、大垣で囲まれた嚴重な城となることがわかる。天智元（662）年には学問僧の道昭が帰朝後、飛鳥寺の東南隅に禅院を創建しており、これに関わる遺構が寺域東南部で礎石建物などが検出されている（奈文研1993）。天武元（672）年の壬申の乱にあたっては「飛鳥寺の北の路より出でて營を臨む」とあり、寺の北側に沿って、あるいは寺から北に向けて道があったことがわかる。天武9（680）年には、飛鳥寺は古くから大寺としての扱いを受けていたことから、今後も国の大寺と同様の扱いを受けることが記されており、官寺としての地位を得ていたことがわかる。この頃の瓦が飛鳥寺XIV形式の軒丸瓦で、中心伽藍では創建瓦に匹敵する量が出土することから、大規模な修理が行われたと考えられる。同14（685）年の天武の発病に際しては、大官大寺・川原寺と並んで、飛鳥三大寺に位置づけられており、文武朝の四大寺（大官大寺・川原寺・本薬師寺）にも含まれている。

奈良時代になると、都が平城京へと遷都するのに伴い、飛鳥寺も養老2（718）年に平城京元興寺として移された。現在の奈良元興寺極楽坊の屋根に飛鳥時代の瓦が使用されていることから、一部の建物は奈良へと移ったが、多くの施設は飛鳥に残されており、「本元興寺」とも呼ばれていた。8世紀前半には回廊内を瓦敷に改修したり、主要伽藍が補修されていることも、出土瓦からわかる。しかし、寺域北東隅の内濠は8世紀前半には埋没しており、西面の内濠も8世紀中頃（平城Ⅲ）から埋没が始まり、寺域周縁部の維持管理が困難になってきたことが予想される。そして、8世紀後半から9世紀前半にかけて、北面大垣が倒壊し、北面外濠も埋没をする。ただし、出土瓦からみる限り、主要伽藍は平安時代にも補修されている。

治安3（1023）年には藤原道長が高野山参詣の時、飛鳥寺に立ち寄り、鐘堂の鬼頭を見ようとしたが果たせなかったことが『扶桑略記』に記されており、このころ宝蔵があったことがわ

かる。また、天喜年間（1053～1057）には東金堂に祀られていた弥勒石像が多武峯平等院に売却されたことが『太子伝古今目録抄』からわかり、この頃から寺運が下がりはじめたのであろう。11世紀には西面内濠が完全に埋没し、寺の西方にある溝も廃絶する。そして、東西金堂・中門・回廊・南大門・講堂も平安時代末には倒壊しており、建久7年の火災時には存在していなかった。

しかし、建久7（1196）年6月17日、雷火によって塔が焼失し、翌8年には心柱の下の舍利が取り出されたことが東大寺の僧弁暁の注進文によって知られる。また、飛鳥大仏も仏頭と手だけが残されたと鎌倉末期の『上宮太子拾遺記』に記されている。塔の火災は発掘調査によっても確認されており、同時に中金堂も焼失したことも確認できる。また、取り出された舍利は新たな容器がつくられ、再埋納されたことも発掘調査で確認した。伽藍の倒壊と中金堂・塔の焼失によって、飛鳥寺は急速に衰退していく。これと同時に飛鳥寺の寺域北半には井戸や柱穴などがみられ、寺域の北半は寺の管理から離れていったことがわかる。永享8（1436）年には大仏を覆う瓦葺の堂が壊されたことが『太子伝玉林抄』に記され、中金堂焼失後のある時期に、大仏を覆う建物が復興されていたことがわかる。しかし、文安4（1447）年には建物はなく、飛鳥大仏は露仏となっていたことがやはり『太子伝玉林抄』に記され、文安4年以降は堂はなかったことがわかる。江戸時代の寛永9（1632）年に大仏を覆う釈迦仏堂が今井村の富井氏によって寄進されており、文政8（1825）年に建てられたのが、現在の安居院本堂である（奈文研1958）。

川原寺（弘福寺）

飛鳥川の左岸の橋寺に対面する川原寺は、当時の境内地は南北333m、東西約250mにも及ぶ。現在は旧寺域の西方が集落となっており、中枢部には法灯を残す弘福寺と光福寺があり、その周囲は水田景観を残していた。ただし、中心伽藍部は昭和47～48年度に環境整備され、現在は史跡公園として基壇等が復元されている。

川原寺の創建は、飛鳥寺のように造営の記録がないのでわからない。しかし、少なくとも天武2（673）年には一切経を川原寺に写すという記事があり、この頃には寺観はかなり整っていたことがわかる。創建年代と発願理由については諸説がみられるが、現在では天智称制の頃に斉明天皇の冥福を祈るために建てられたとする説が有力である。

発掘調査によると、川原寺の下層には7世紀前半の大規模な造成事業がみられ、石組暗渠や唐居敷などが見つかっており、斉明天皇の川原宮の有力な候補地となっている。天武14（685）年には天武天皇が川原寺に行幸し、稲を賜うという記事がみえ、この頃には川原寺も完成していたのであろう。さらに同年の天武天皇発病に際しては、飛鳥寺・大官大寺と共に川原寺で三日間の経が読まれたり、翌年には薬師経が説かれ、天武天皇の仏事には必ず登場する重要な寺であったことがわかる。また、持統・文武天皇崩御に際しても、大安寺（大官大寺）・薬師寺・元興寺（飛鳥寺）と並んで、川原寺に齋が設けられていた。

しかし、都が平城京へと遷都すると藤原京内の寺々が奈良へと法灯を移すのに対して、川原寺は飛鳥に残ったままである。この頃から川原寺の地位が徐々に下がっていく。天平勝宝元（749）年、聖武天皇は墾田を諸寺に施入するが、大安寺・薬師寺・元興寺・興福寺・東大寺が一番多く。次に法隆寺、さらに下に四天王寺と川原寺が位置する。また、同じ年に墾田地の限界が定められるが、川原寺は法隆寺・四天王寺・崇福寺・新薬師寺・建興寺などに比べて少なかったことから、第一級の地位はすでに失っていたことがわかる。しかし、宝亀2（771）

年には光仁天皇が、田原天皇の忌齋を川原寺で設けたという記事があり、翌3（772）年には百万塔が10万基寄進されたことなどからみて、まだ重視されていたことは間違いない。

平安時代になると、大同2（807）年に伊豫親王が讒言によって母の藤原吉子と共に、川原寺に幽閉され、毒を仰いで自殺したことが記されている。光仁元（810）年には伊豫親王の霊を慰めるための経が読まれたり、崇道天皇のための法華経が写されている。天長9（832）年、空海は京都と高野山の往復の宿として川原寺を賜ったと『水鏡』や『弘法太師御遺告』に記されている。この頃から、川原寺と真言宗の関係が始まったと考えられ、東寺の末寺になった。

川原寺は記録で明確ではないが、平安時代前期に一度焼亡していることが伺われる。『弘福寺領庄田注進』によると所領を公認する文書（本公驗）が寺家焼亡の時に焼失したとする。この時の火災の片づけをしたのが、川原寺の北西で見つかった川原寺裏山遺跡の遺物群で、塑像などが含まれていることから、中金堂や塔・西楼が焼失したものと思われる。中金堂の基壇内の焼土がこれにあたる。また、中金堂再建にあたって作られた仏像が、現在も残る持国天像と多聞天像であろう。

建久2（1191）年、『玉葉』には東寺末寺川原寺焼失のことが記されている。発掘調査では伽藍全域で火災の痕跡がみられ、中金堂・西金堂・塔・中門・回廊・西楼・講堂・僧房が焼失していることを確認している。ただし、東僧房は平安後期にすでに廃絶しており、建久火災時には存在していなかった。その後、伽藍の復興は思うに任せず、鎌倉時代中期から13世紀末までに蓮如坊教弁の活躍によって、中金堂・塔・南門・西楼・僧房・食堂などが再建された。建久の火災の後、寺域西方には柱穴や溝が見られるようになる。特に、12世紀には環濠が掘られ、14世紀までに、この地域に環濠集落が存続したことがわかる。これは現在の集落と重なる点は重要であろう。この頃、川原寺は東寺の末寺となっていたが、興福寺に攻められている。

『諸寺縁起集』によれば、室町時代中期には金堂と三重塔が残されていたとするが、『午年諸寺参詣記』によれば、16世紀前半に雷火によって三度目の焼失。塔跡と西に薬師堂跡、北に観音堂跡が残るとする。中金堂にはこの時の火災の痕跡が残されている。延宝9（1679）年の『和州旧跡幽考』には、草堂一字と二天および十二天像が、また、西金堂跡に薬師堂があるとされる。現在の本堂は、棟札から天保11（1840）年上棟とあり、建立の年代がわかるが、さらに別の棟札からこの前身建物が貞享甲子（1684）年中再建とあることから。前身建物の建立年代も判明する。『菅笠日記』によると本居宣長が明和9（1772）年に川原寺を訪れており、本堂前の礎石や脇の瑠璃の礎石を見たと記しており、この時の本堂が前身建物にあたるのであろう（奈文研1960・2004・2006）。

橘 寺（菩提寺・橘樹寺）

飛鳥川の左岸に位置する橘寺は、川原寺と対面するような立地にある。当時の境内地については北辺を除いて明確ではないが、東辺は地形からみて南北道まで、西辺はこれまでの成果から南北約200m、東西約400mの範囲が旧境内地であったと考えられる。現在は中心伽藍の地に、現橘寺が法灯を伝えており、東辺に沿って東橘の集落が、西辺に沿って西橘の集落が広がる他は水田景観が広がっている。

橘寺の創建については記録がなく、明確ではないが、聖徳太子建立の寺のひとつとする説は天平19（747）年の『法隆寺伽藍縁起并流記資材帳』にみえる。橘寺の最も古い記録は天武9（680）年「橘寺の尼房に失火して、十坊を焚く」である。このことから天武9年には尼房が完成しているほど、伽藍が整備されていたことがわかる。しかし、その創建は境内での発掘調査で飛鳥

寺と同範の瓦が出土することから、7世紀前半には金堂が建てられたと考えられる。その後、7世紀中頃には塔が建設され、川原寺式の瓦が出土することから、7世紀後半に川原寺と同時期に整備されたことがわかる。その後、7世紀末の瓦が出土することから、この頃にも伽藍が整備されたと考えられる。

奈良時代の橘寺では、天平20(748)年に花嚴伝1巻を東大寺写経所に貸し出したり、天平勝宝5(753)年に東大寺司が写経したりと、光明皇后が行った写経活動に尼師善心と呼応している。善心は法華寺阿弥陀浄土堂の造営にも寄付をするほどの経済力を持っていた。天平勝宝8(756)年には嶋の御田11町が寺に寄進された。また、北門及び北面築地を再建したのもこの頃である。

平安時代初めにも火災があったことが『類聚国史』によって知られ、これに関連して延暦14(795)年には大和国の稲2000束を菩提寺(橘寺)復興のために施入している。ただし、当時の火災の規模については明らかではない。治安3(1023)年には藤原道長が高野詣での途中、飛鳥寺・山田寺等とともに橘寺を訪れている。この頃になると寺勢も衰えてきており、『法隆寺金堂日記』によると承暦2(1078)年に橘寺から49体の金銅仏が法隆寺に移されている。これらは橘寺の僧侶が少なくなり、仏像の盗難を恐れ、本寺である法隆寺に移されたのであろう。また、承暦年間(1077~1080)には真言宗醍醐寺の末寺になったという。

久安4(1148)年に雷火によって塔が焼失するが、建仁3(1203)年には三重塔に変更して再建工事が始まる。この三重塔には豊浦寺の塔の四方仏が嘉禎年間(1235~1238)に移されたことが記されている。『和州橘寺勧進帳』によれば、建長年間(1249~1255)に覚空上人が橘寺の修理を計画するが頓挫し、その後、弘安元(1278)年に僧房・浴室・経蔵・鐘樓の修理を計画し、広く勧進が行われたことがわかる。伽藍の南側では10基以上の瓦窯が並んで見つかり、出土遺物から13世紀のものと考えられる。時期的にみて建仁の復興に伴うものの可能性が高い。この時の塔の再建時には基壇外装に花崗岩を使用している。この中世橘寺の伽藍は『菅家本諸寺縁起集』によれば、「九間四面大講堂・二階金堂・三重塔婆・七間四面太子殿・三間灌頂堂・長日不断護摩堂・鐘樓・経蔵・如来堂・二十一間長僧房・六十九間廻廊・庫院・靈堂・浴室など」があることが判明する。また、鎌倉時代には2×3間の八脚門の北門と北限塀が築地に改修されている。

室町時代になると、橘寺も戦乱に巻き込まれることになる。『看聞御記』によると永享10(1438)年には橘寺が攻められ、明応6(1497)年には多武嶺の衆徒によって攻められ、如来堂と太子堂以外の大部分が焼失した。『談峯澤蔵兵乱記』によれば、永正3(1506)年に再び多武峯の衆徒に襲われ、如来堂と太子堂もついに焼け落ちた。

江戸時代には『和州寺社記』『和州旧跡幽考』などによって、能楽師金春八郎太夫が再興した講堂(太子堂)だけが残されていたらしいことがわかる。また18世紀頃の様子は『大和名所図会』によると太子堂と観音堂が描かれている。その後、明治5年に礼堂、同3年に太子殿が完成した(檀考研1999・亀田2001・花谷2000・大脇1989)。

豊浦寺(建興寺)

飛鳥川左岸に位置する豊浦寺は、推定山田道の南側の山裾にある。寺域については明確ではない。豊浦寺の創建については『日本書紀』によると、仏教公伝の過程で登場する。欽明13(552)年に百濟の聖明王が献上した金銅仏などを蘇我稲目が小墾田の家に安置し、その後向原の家に移して寺としたことにはじまるとされる。さらに物部守屋はこの塔を倒し、仏殿を焼き払い、

仏像を難波の堀江に捨てたと記す。一方、『元興寺縁起并流記資財帳』によると、戊午（538）年に牟久原殿に仏殿が設けられ、これが敏達11（582）年には「桜井道場」と呼ばれ、同15年には桜井寺と改称し、等由羅寺に発展したとする。

豊浦寺が正史に登場するのは舒明即位前紀（628）で、山背大兄王が蘇我蝦夷の病の見舞いに来たときに、豊浦寺に滞在したと記されており、さらに『聖徳太子伝暦』には舒明6年（634）に塔の心柱を建てるとある。朱鳥元（686）年、天武天皇の追福のため、豊浦寺をはじめ五大寺で無遮大会が行われている。よって、創建の年代は史料からは明確にはし難いが、628年には何らかの建物（金堂？）が建てられており、舒明6（634）年に塔を造営し、朱鳥元（686）年の段階では完成していたと考えられる。これらのことは講堂の下層に6世紀後半から7世紀初頭の掘立柱建物があり、豊浦宮の一部であると考えられることや、金堂が寺域造成の整地と一連で作られていること、創建瓦からみて、金堂の創建時期は590～610年の間に位置付けられる。塔は発掘調査で基壇を確認していないが、出土瓦から7世紀第Ⅱ四半期に考えられる。また、講堂と尼房あるいは回廊と考えられる遺構もこの頃に造営されており、7世紀後半には完成していたことを裏付けている。

都が平城京へ遷った後も、豊浦寺は飛鳥に残留しているが、奈良時代の天平勝宝元（749）年には聖武天皇の勅施入があり、華嚴経購読料として布。綿や稲、墾田地100町が当てられたり、墾田地500丁の開墾が許されたりしている。また、天平宝字7（763）年には常陸国の50戸が豊浦寺の寺封になるなど、寺勢は大きくなっていく。これに合わせるように、8世紀前半に金堂周辺を瓦敷に改修し、講堂の雨落溝も改修している。また、後半には金堂と講堂の間を玉石を敷きつめている。

平安時代には目立った記録はないが、元慶6（882）年には蘇我氏の子孫である宗岳木村が建興寺（豊浦寺）は蘇我稲目が創建した寺なので、宗岳氏が管理したいと申し出たが、豊浦寺別当は豊浦宮を施入した御願寺なので氏寺ではないと採決したという記録がある。10世紀前半には金堂と講堂間をバラス敷に改修するが、回廊（尼房？）は11世紀後半までには廃絶しており、講堂も12世紀に廃絶する。このように平安時代末には豊浦寺の寺勢は急速に衰えてきた。

鎌倉時代になると、講堂跡地に床張りの仏堂を再建し、寺の東側には子院が成立し、石組の方形池も作られるが、嘉禎年間（1235～1237）には塔の四方四仏が橘寺の再建された塔に移されていく。明応6（1497）年には細川政元軍は多武峰徒衆と豊浦周辺で合戦を繰り広げ、『尋尊僧正記』には多武峰側の降伏条件として豊浦郷を焼き払うことが記されており、講堂跡地に建てられていた仏堂は15世紀後半に焼失していることや、金堂が廃絶していることは、これらの記事を裏付けていよう。その後、16世紀以降、寺域東方は水田になって現在に至る（檀考研1995・1998・2001・奈文研1981・1986・花谷2000b）。

奥山廃寺（小墾田寺）

奥山廃寺は山田道の北方に位置する。現在は奥山集落が伽藍中心部と重なっている。しかし、塔及び金堂推定地には、現在も久米寺があり、塔基壇が良好に残され、十三重石塔が建てられている。金堂は現在の庫裡の下にあたる。

奥山廃寺はその創建の由来や造営氏族については明らかではなく、一般には奥山久米寺と称されていた。そこで奥山廃寺を高市大寺とする説（田村1960・網干1980）もあったが、近年は、当地が古代小墾田地域にあたることから、「小墾田寺」と推定する説が有力である（大脇1997・小澤1995）。これまでの発掘調査によると、7世紀前半に金堂、7世後半に塔の造営と金堂の

改修が推定されてきた（奈文研1990）が、近年、佐川正敏・西川雄大氏によって、瓦の分布と年代から、塔の年代を金堂に後続する7世紀前半とした（佐川・西川2000・花谷2000a）。ここではこれに従う。

小墾田寺に関する最初の記録は朱鳥元（686）年の天武天皇のために行われた無遮大会が五大寺（大官大寺・飛鳥寺・川原寺・小墾田豊浦寺・坂田寺）で行われたことである。この頃すでに伽藍がある程度整っていたことはわかる。発掘成果によると、出土瓦から、金堂の造営は7世紀前半と推定される。塔の造営もこれに続いて7世紀前半（630年代）には着手されていた。7世紀後半には伽藍全体の屋根改修を施しており、金堂基壇外装の改修もこの頃である。これと同時に金堂と塔の間に参道を設置した大改修である。この大改修の時期と朱鳥元（686）年の無遮大会の時期がほぼ重なる。ただし、奥山廃寺出土瓦には7世紀初頭の星組の軒瓦が出土しており、塔基壇下層には別の掘込み事業があり、あるいは7世紀初頭に小規模な仏堂があったのかもしれない。

奈良時代になると回廊内が瓦敷に改修されるが、天平勝宝2（750）年には東大寺施入の官奴婢を小墾田禅院に住ませたり、天平勝宝7（763）年には50戸を小墾田寺に施入させたりしたという記事が『東南院文書』『真抄格勅符抄』に記されている。このことから奈良時代の奥山廃寺も依然勢力をもった寺であったことがわかる。

平安時代初頭には寺域東北の井戸から「少治田寺」墨書土器が出土しているが、奥山廃寺がの廃絶がいつ頃かというのは明らかではない。出土瓦から平安時代まで存続しているのは確かであり、金堂の東側では中世の土坑があることや、塔跡に鎌倉時代の十三重の石塔が建てられていることから、12世紀には廃絶していたものと推定される。ちなみに現在の庫裡は近世以降の建物である。

山田寺（浄土寺）

阿倍山田道に面して建てられた山田寺は、当時の境内地は南北185m、東西117mの境内地をもつ。現在は旧講堂上に法灯を伝える浄土寺があるだけで、ほぼ全域が水田となっていた。昭和51年からの調査でその全貌が明らかとなり、現在は環境整備され史跡公園となっている。

山田寺は蘇我倉山田石川麻呂の発願により、舒明13（641）年に造営整地作業が開始された。その作業は南北250m、東西150mの範囲を平坦にするもので、幾つもの尾根を削り、谷を埋めていることが発掘調査の結果判明している。2年後の皇極2（643）年には金堂を起工し、大化4（648）年には「始めて僧住む」という記事から、このころには金堂が竣工しており、僧房も完成していたことがわかる。また、発掘調査では金堂に続いて回廊・中門・大垣もこの頃に造営されたと考えられる。しかし、大化5（649）年、石川麻呂が蘇我日向の讒言によって自害したことによって、その造営は頓挫する。その後、石川麻呂の無実が判明し、その造営が再開されたのは天智2（663）年になってからである。ここで「塔を構える」とあり、天武2（673）年には「心柱を立てて舍利を納め」と、天武5（676）年には「路盤をあげる」とあることから、塔の本格的な造営は天武2年まで下り、天武5年に完成したと考えられる。その後、天武7（678）年に丈六仏像の鑄造が始まり、天武14（685）年に開眼した。この仏像は後に興福寺へと持ち去られる仏頭であり、講堂に安置されていたものであることから、この頃には講堂も完成していたと考えられる。7世紀後半には金堂・回廊の瓦を補修し、南門及び大垣も建替えている。さらに僧房や宝蔵を建築している。

文武3（699）年には、30年を限りに封三百戸が施入されており、大宝3（703）年には四大

寺（飛鳥寺・大官大寺・薬師寺・川原寺）などと共に、齋が設けられており、四大寺に次ぐ、寺格を有していたことがわかる。しかし、奈良時代になると、石川麻呂の弟の連子の曾孫である石川年足が大般若経一部を寺田からとして納めたことが知られる程度で、記録は少ない。8世紀中頃には回廊内を瓦敷にしたり、東北院を増設したりしており、8世紀後半～9世紀初頭にかけて小規模な屋根の修理がなされたい。

平安時代には、9世紀中頃に宝蔵が建替えられ、10世紀前半には大垣を築地に改修している。10世紀後半には回廊を改修し、合わせて回廊内をバラス敷にしている。この頃、東北院は廃絶している。治安3（1023）年には藤原道長が山田寺に訪れており、堂塔を拝したことが『扶桑略記』に記されている。また、嘉保3（1096）年には山田寺と多武峯浄土堂の鐘が交換されたことが『多武峯略記』に記され、この頃山田寺は多武峯の末寺になっていたと考えられる。11世紀前半には土砂崩れによって東回廊と宝蔵が倒壊するが、道長の参詣した当時は、すでに寺観は荒廃していたことが予想される。その後、山田寺は興福寺の末寺になっており、文治3（1187）年には興福寺僧兵によって講堂丈六三尊像が略奪される。金堂・塔・南門・講堂は12世紀末頃に焼失しており、先の興福寺僧兵乱入の時に焼き討ちにあった可能性が高い。

その後、承久8（1197）年には『多武峯略記』に「堂塔・僧房・鐘楼・経蔵等の跡あり」と記されており、建物はなかったと考えられる。しかし、発掘調査では講堂跡から興福寺銘の鎌倉時代初頭の瓦が出土しており、本堂が再建されたことがわかる。また、講堂の東方では13世紀後半の梵鐘鑄造遺構が検出されており、北面回廊の南方には13～14世紀の井戸が多数見つかっており、この頃の集落が展開していたと考えられる。本堂は棟札から元禄15（1702）年再建の建物であったことがわり、現在の本堂は明治30（1955）年に再建された（奈文研2002）。

岡寺（龍蓋寺）

岡寺は飛鳥の東方丘陵の山腹に位置している。周囲は森に囲まれた社叢が現在の岡寺を包んでおり、仁王門の手前西側には治田神社が鎮座している。岡集落の参道入口に鳥居が建っており、これをくぐると急な坂道の参道となり、岡寺へと続く。

この岡寺の創建時期について示す記録はないが、この寺の創始が義淵僧正であったことは、いくつかの史料にみられる。『醍醐寺本諸寺縁起集』には龍蓋寺・龍門寺は故義淵僧正が建立したとする。また、『東大寺要録』には義淵は草壁皇子と共に育てられ、皇子没後にその宮を寺としたとみえる。いずれにしても岡寺の創建に義淵がかかわっていたことは伺われる。草壁皇子が没したのは持統3（689）年で、義淵が没したのは神亀5（728）年なので、史料を信用する限り、岡寺の創建はこの間ということになる。これを証するように、治田神社境内で壇状積基壇をもつ建物が検出されている。出土した軒瓦は7世紀末から8世紀初頭のもので、岡寺創建瓦と考えられている。当境内地における伽藍配置は知る術はないが、岡寺が所有する絵図によると、金堂の南西に塔があったことがわかる。また、これと同時期の瓦が現岡寺本堂周辺からも出土することから、ここにも創建段階の小規模な建物があったことがわかる。この創建段階の岡寺の本尊こそ、江戸時代に現本尊胎内から取り出された金銅製半跏思惟菩薩像が相応しい。

奈良時代には『正倉院文書』の天平12（740）年のこととしては、岡寺の所蔵する経典を官の写経所に貸し出されていることが記されている。天平15（743）年には「律論疏集伝等本収納并返送帳」では興福寺が岡寺の経典を借りている。このように、この頃には伽藍が整備され、多くの経典を保有していたことがわかる。天平宝字6（762）年には、淳仁天皇が越前国江沼

郡の山背郷戸50烟を岡寺に施入した記事がある。

平安時代になると、現在の本尊である塑像如意輪観音坐像が8世紀末から9世紀前半と考えられているので、現境内地に本堂が建てられていたことが推定できる。残念ながら発掘調査ではこの本堂を確認していないが、9世紀末には境内地から燃燈供養に用いられた土師皿が出土しており、鎌倉時代末までこの傾向は続く。また、平安時代には龍蓋池が現在よりも大きく、本堂のすぐ際まで水際が及んでいたことも判明している。一方、治田神社境内の堂塔は平安時代にも屋根の補修をしていたとみえ、この頃の瓦も出土している。当時、岡寺は貞観10(868)年の太政官符に、夏安居の講師経験者から選出すべきとし、15大寺の次に位置する寺格を有していたことがわかる。長保2(1000)年に岡寺別当の選出が行われ、興福寺別当が兼務するとする。これ以降興福寺とのつながりが密接になってくる。『水鏡』には龍蓋寺の厄除信仰を語る話が冒頭にあげられており、厄除祈願としての信仰は平安時代後期まで遡ることが知られる。

鎌倉時代の建保4(1216)年には、『諸寺建立次第』によると本尊と三重塔だけが記載されており、この頃治田神社境内地にあった堂塔については廃絶していた可能性が高い。当地での出土瓦の有無もこれを裏付けており、平安時代の中で、岡寺の中心は治田神社境内地から現岡寺境内へと漸次遷って至ったのであろう。弘安6(1283)年には『勘仲記』に興福寺と多武峯の争いで岡寺周辺が焼失したと記される。塔の西側斜面には6世紀後半の横穴式石室墳が見つかっている。この古墳は13世紀頃には開口していたとみえ、皿が納入されている。おそらくこの頃に何らかの信仰上の施設に転用されていたのであろう。また、13世紀中頃には龍蓋池も現在の規模に縮小している。

室町時代の文明4(1472)年には大風で塔が倒壊した記録が『大乘院日記』に残されており、すぐに再建が計画されたが、応仁の乱の最中でもあり、思うように進まず未完成であったと考えられる。

江戸時代になっても、岡寺は興福寺の末寺であったが、真言宗に属していた。この関係から長谷寺から住持が入って、以降、豊山派に属する長谷寺末寺となった。仁王門は解体修理の結果、慶長17(1612)年の建立であることが判明したが、一部に室町時代の古材が使用されていることが判明、未完成の塔の部材を再利用していることが分かった。また、楼門も慶長年間(1596~1614)の建築で、書院もほぼ同時期に建てられている。本堂は文化2(1805)年の建築で、この向かいにある鐘楼の梵鐘は文化5(1808)年の銘をもつ(大脇1989・檀考研1983・2001・2002a)。

坂田寺(金剛寺・坂田尼寺)

坂田寺は石舞台の南方の山間部から飛鳥川へ下る斜面部を造成して作られている。伽藍の中枢部には斜めに県道が通過しているが、これは近年の新しい道路である。これ以前には現在も地割として残る里道が主要な道路であった。近年まで伽藍跡には一部の民家があるのみであったが、他は水田が広がっていた。

坂田寺の創建については諸説があり、『扶桑略記』には継体16(522)年に司馬達等が坂田原に草堂を建て、本尊を安置したとある。また、『日本書紀』には用明2(587)年に鞍部多須奈が天皇の病氣平癒のために出家し、仏像と寺をつくったとする。さらに推古14(606)年に飛鳥大仏の金堂への安置の功績により、鞍作鳥が近江坂田郡の田を賜り、これを坂田寺の造営にあてたとする。これらの諸説の信憑性については明らかではないが、渡来系氏である鞍作氏の氏寺として飛鳥時代でも早い段階で作られた寺院であることは間違いなさそうである。このこ

とは、坂田寺跡から素弁十弁蓮華文軒丸瓦や手彫り偏行忍塔唐草文軒平瓦が出土することから、その創建は7世紀初頭に遡ることがわかる。飛鳥時代の坂田寺の伽藍はいまだ確認されていないが、7世紀前半の石組溝や方形池が見つまっている。また、7世紀後半の土坑や溝もあり、出土瓦からは7世紀初頭の創建後、7世紀前半・中頃・後半・藤原宮期の瓦も出土しており、伽藍造営の継続、あるいは屋根の補修が行われていたことが推測される。これを証するように『日本書紀』には朱鳥元（686）年に天武天皇のために大官大寺・飛鳥寺・川原寺・豊浦寺と共に無遮大会が開かれており、当時、格の高い寺院として飛鳥五大寺に含まれていた。

その後、坂田寺が注目を集めるのは、奈良時代前半のことである。坂田寺の尼僧信勝は天平9（737）年に經典を内裏に進上するなど、内裏と密接な関係を持つようになる。さらに天平勝宝元（749）年には東大寺大仏殿東脇侍を寄進する。西脇侍を寄進したのは法華寺であったことを考えると、この頃の坂田寺はかなりの財政力と中央との太いパイプを持っていたことが伺われる。奈良時代の坂田寺は発掘調査でかなり判明してきている。信勝尼のいた奈良時代前半にはすでに金堂は建てられており、出土する土器から法会も催されていたことがわかる。また、伽藍の西方に大型の掘立柱建物があり、信勝尼の住居として有力視されている。回廊や講堂、回廊内建物がこの段階で建てられていたかは確認できないが、少なくとも、金堂の須弥壇が改修される765年以降には存在していたものと考えられる。

その後、9世紀前半には伽藍北方にあった井戸が改修されるが、10世紀になるとかなり衰退し、伽藍は荒れた状態となっていた。そして、10世紀後半には山側から押し寄せてきた土砂崩れによって伽藍中枢部が倒壊し、少なくとも中心伽藍は廃絶する。しかし、平安時代後半の『興福寺大和国雑役免坪付帳』には坂田寺の寺田の記述があり、承安2（1172）年には多武峯の末寺になっていたことから、何らかの形態で法灯は保たれていたと考えられる。伽藍跡は少なくとも、15世紀には水田と化していたことが発掘の成果からわかっており、現在の坂田寺の法灯を伝える金剛寺は、場所を山上方へ移しているが、出土瓦から見ると、その移転は近世以降の出来事のようなのである（飛鳥資料館1983・西川2005・西口2002）。

立部寺（定林寺・常林寺）

定林寺は飛鳥南方の独立丘陵上に位置している。現在は史跡として維持管理がなされているが、昭和60年代まで春日神社が伽藍中心部に建っていた。その後、神社はやや東に下った位置に遷った。集落は丘陵の東方に広がっており、丘陵の北・西・南の谷筋は水田が良好に広がっている。

定林寺の創建については明確ではなく、『聖徳太子伝暦』や『太子伝私記』は、太子建立の七か寺の一つとしてあげているが、他の記録には一切現れない。

発掘調査は部分的ではあるが、塔・推定講堂・回廊の一部を確認している。ただし、鎌倉期の改修や調査面積が狭いこともあり、塔を除いて、飛鳥時代の伽藍は明らかとはなっていないが、出土した瓦からある程度の寺の変遷は追うことができる。

定林寺の創建瓦は飛鳥寺と同じ素弁十一弁蓮華紋で、定林寺の創建を7世紀前半と推定できる。また、川原寺式・藤原宮式の軒瓦から7世紀後半～末に次の建物が造営、あるいは伽藍の修理がなされたと考えられる。次に巴文軒丸瓦と斜格子文軒平瓦が鎌倉時代の修理に伴う瓦で、乱石積基壇化粧の改修もこの頃である（奈文研1978）。寺院のすぐ北の谷では室町時代まで流れを変えながらも流路が流れており、この頃に完全に埋没し、水田景観へと変わっていく（明日香村1994）。

飛 鳥 寺

年 代	古 記 録	発 掘 成 果
用 崇 推 皇 天 天	<p>明2年(587) 蘇我馬子が飛鳥寺造営を発願 峻元年(588) 飛鳥衣縫造祖樹葉の家を壊して造営開始 3年(590) 材をとる 5年(592) 仏堂・歩廊起工 古元年(593) 舍利を心礎に納める 4年(596) 塔の竣工 13年(605) 仏像をつくりはじめる 14年(606) 仏像安置 極4年(645) 乙巳の変にあたり飛鳥寺を城とする 智元年(662) 道昭の東南禅院創建 武元年(672) 飛鳥寺の北路よりでる 9年(680) 飛鳥寺の官寺化 14年(685) 飛鳥三大寺(大官大寺・川原寺) 15年(686) 飛鳥五大寺で無遮大会</p>	<p>境内地の造成</p> <p>飛鳥大仏</p> <p>寺域東南禅院</p> <p>7世紀後半の軒丸瓦多数出土</p>
文 大	<p>武4年(700) 道昭禅院で没する 宝2年(702) 藤原京四大寺</p>	
養	<p>老2年(718) 元興寺を平城へ遷す</p>	<p>回廊内を瓦敷に(8世紀前半) 主要伽藍補修(8世紀) 東北隅の内濠埋没(8世紀前半) 西面内濠埋没始まる(8世紀中頃) 内濠を壊す土坑(8世紀中頃) 東面大垣の内側で井戸(8世紀後半) 北限大垣が壊され、北面外濠埋没 (8世紀末～9世紀初頭)</p>
承 治	<p>和10年(843) 万花会と万燈会の料として300束給す 安3年(1023) 藤原道長が高野山参詣時に立ち寄る [扶桑略記]</p>	<p>主要伽藍補修(平安) 西面内濠埋没(平安後半) 寺の西方の溝などが埋没(11世紀) 東西金堂・中門・回廊・南門・講堂倒壊 (12世紀後半)</p>
天喜年間(1053-1057)	<p>東金堂の弥勒石像を多武峯平等院に売却 [太子伝古今目録抄]</p>	
建	<p>久7年(1196) 落雷で焼失 8年(1197) 焼失した塔から舍利を出す[大日本史料]</p>	<p>中金堂・塔焼失(12世紀末) 塔埋納物を再埋納 寺域北半で井戸・溝・柱穴(13世紀)</p>
永 文	<p>享8年(1436) 大仏の覆う堂が壊される 安4年(1447) 大仏は露仏になっていた[太子伝玉林抄]</p>	
寛 明 文	<p>永9年(1632) 釈迦仏堂建築 和9年(1772) 本居宣長が参詣[菅笠日記] 政8年(1825) 安居院本堂建築</p>	

川 原 寺

年 代	古 記 録	発 掘 成 果
天 武 2年 (673) 14年 (685) 朱 鳥元年 (686)	一切経の写経 飛鳥三大寺 (大官大寺・飛鳥寺) 川原寺の伎楽を築紫へ運ぶ 飛鳥五大寺で無遮大会	川原宮造営 (7世紀中頃) 川原寺創建 (660年代後半・天智称制時)
大 宝 2年 (702)	藤原京四大寺 (大官大寺・薬師寺・飛鳥寺)	
宝 龜 2年 (771) 3年 (772)	田原天皇の忌齋を設ける 十大寺に百萬塔を寄進する	北辺で双倉 (8世紀前半) 北辺で工房 (8世紀末～9世紀初頭)
光 仁元年 (810) 承 和 2年 (835) ～延喜 9年 (909)	伊豫親王のための読経 落雷で焼失 [弘福寺領庄田注進]	中金堂・西楼焼失 川原寺裏山遺跡 (9世紀後半) 東僧房は廃絶 (平安中頃～後半) 東僧房に井戸 (平安後期) 西方で石組井戸 (12世紀後半) 北方で建物 (平安末～中世)
建 久 2年 (1191)	焼失 [玉葉]	中金堂・西金堂・塔・中門・回廊・講堂 ・西楼・僧房焼失 (12世紀末)
弘 安 4年 (1281)	興福寺が川原寺を攻める [勘仲記]	中金堂・塔・西楼再建 (13世紀) 講堂跡地に屋敷 (13世紀以降) 西方で建物・窯状遺構・溝 (13世紀) 西方で井戸 (12～13世紀) 西方で環濠 (12世紀後半～14世紀)
室町中期 16世紀前半	金堂と三重塔あり [諸寺縁起集] 落雷で焼失 [午諸寺参詣記]	中金堂・塔焼失
延 宝 9年 (1679) 貞享甲子年 (1684) 明 和 9年 (1772) 天 保 11年 (1840)	薬師堂・草堂 1あり [和州旧跡幽考] 前身本堂建築 本居宣長参詣 [菅笠日記] 現本堂建築	西金堂の東側に池 (近世)

橋 寺

年 代	古 記 録	発 掘 成 果
天 武 9 年 (680)	尼房焼失	金堂創建 (7世紀前半) 塔創建 (7世紀中頃) 伽藍整備 (7世紀後半)
天 平 20 年 (748)	花嚴伝 1 巻を東大寺写経所に貸す	塔改修 (7世紀末～8世紀初頭)
天 平 勝 宝 5 年 (753)	尼善心の宣により東大寺司が写経	講堂創建 (8世紀)
8 年 (756)	嶋宮の御田11町を施入[上宮太子拾遺記]	北門・築地建築 (8世紀)
延 暦 14 年 (795)	火災のため、大和国の稲 2 千束を施入 [類聚国史]	塔改修 (8世紀)
治 安 3 年 (1023)	藤原道長の参詣[扶桑略記]	
承 歴 2 年 (1078)	49体の金銅仏を法隆寺に移す [法隆寺金堂日記]	
久 安 4 年 (1148)	落雷で塔が焼失[上宮太子拾遺記]	
建 仁 3 年 (1203)	塔の復興はじまる	塔・北門再建 (13世紀)
嘉 禎 年 間 (1235～1238)	豊浦寺の塔の四方仏を三重塔に移す [上宮太子拾遺記]	10基以上の瓦窯 (13世紀)
弘 安 元 年 (1278)	橋寺修営の勸進を行う[和州橋寺勸進帳]	
貞 和 4 年 (1348)	高師直が陣をはる[園太暦]	
永 享 10 年 (1438)	焼失(焼き討ち)[看聞御記]	
明 応 6 年 (1497)	如来堂・太子堂以外全て焼失 [大乘院寺社雑記]	
7 年 (1498)	橋寺建立勸進[大乘院寺社雑記]	
永 正 3 年 (1506)	多武峰の衆徒による焼き討ち[高市村史]	北門焼失 (16世紀)
寛 文 年 間 (1661～1673)	講堂のみ存在[寛文寺社記]	
延 宝 7 年 (1679)	金春八郎太夫、伽藍復興する [和州旧跡幽考]	
明 和 9 年 (1772)	本居宣長参詣[菅笠日記]	
安 永 6 年 (1776)	観音堂再建[棟札]	
天 保 6 年 (1835)	伽藍大修理[和州高市郡橋寺一切諸記録]	
慶 応 元 年 (1865)	菩提寺造立[宝篋印塔銘]	菩提寺の溝・土坑・塀 (近世)
2 年 (1866)	茶所造立[宝篋印塔銘]	
明 治 5 年 (1872)	拝堂・東門・西門・経堂建立[棟札]	
13 年 (1880)	太子殿建立[棟札]	

豊 浦 寺

年 代	古 記 録	発 掘 成 果
推古元年 (593)	豊浦宮を寺にする [元興寺伽藍縁起並流紀資材帳]	講堂下層に掘立柱建物 金堂創建 (7世紀初頭)
舒明天6年 (634)	豊浦寺に山背大兄王が滞在 塔造営	塔創建 (7世紀前半) 講堂・尼房か回廊創建 (7世紀前半)
朱鳥元年 (686)	五大寺で無遮大会 (この頃には完成)	金堂周辺に瓦敷 (8世紀前半) 講堂雨落溝改修 (8世紀前半)
天平勝宝元年 (749)	聖武天皇の勅施入墾田地500丁の開発が 許される	
7年 (763)	常陸国50戸が寺封として与えられる [新抄格勅符抄]	金堂と講堂間に玉石敷 (8世紀後半)
元慶6年 (882)	宗岳木村が管理を申し出る	金堂と講堂間にバラス敷 (10世紀前半) 尼房か回廊廃絶 (11世紀後半までに) 講堂廃絶 (12世紀)
嘉禎年間 (1235～1237)	塔の四仏が橋寺の塔に移される [上宮太子拾選記]	仏堂再建 (13世紀初) 石組池 (13世紀)
明応6年 (1497)	豊浦寺付近で越智軍と多武峰衆徒の合戦 越智軍に焼払いか[尋尊大僧正記]	金堂・仏堂・尼房か回廊焼失 (15世紀末) 東部地域が水田になる (16世紀以降)

奥 山 廃 寺

年 代	古 記 録	発 掘 成 果
朱鳥元年 (686)	五大寺 (大官大寺・飛鳥寺・川原寺・小 墾田豊浦寺・坂田寺) で無遮大会を行う	7世紀初頭の瓦出土 金堂創建 (7世紀前半) 塔造営 (630年代) 屋根改修・参道設置・金堂改修 (7世紀後半)
天平勝宝2年 (750)	東大寺施入の官奴婢を小墾田禅院に居住 させる[東南院文書]	回廊内を瓦敷 (8世紀)
7年 (763)	50戸を施入する[新抄格勅符抄]	井戸・少治田寺墨書土器 (8世紀末～9世紀初頭) 平安時代の瓦出土
		十三重石塔 (13世紀) 土坑 (中世)
		土坑 (近世) 現庫裏建設 (近世以降)

山 田 寺

年 代	古 記 録	発 掘 成 果
舒 明13年 (641)	浄土寺建立の地を定め、整地する [上宮聖徳法王帝説裏書]	山田寺下層で50m四方の区画 (7世紀前半)
皇 極 2年 (643)	金堂建立[上宮聖徳法王帝説裏書]	整地 (7世紀中頃)
大 化 4年 (648)	僧侶が住む[上宮聖徳法王帝説裏書]	金堂建設 (7世紀中頃)
5年 (649)	石川麻呂の変	回廊・中門・大垣建設 (7世紀中頃)
天 智 2年 (663)	造塔に着手[上宮聖徳法王帝説裏書]	
天 武 2年 (673)	塔の心柱を立つ・舍利を納める [上宮聖徳法王帝説裏書]	塔建設 (7世紀後半)
5年 (676)	塔完成[上宮聖徳法王帝説裏書]	講堂完成
7年 (678)	丈六仏を铸造[上宮聖徳法王帝説裏書]	
14年 (685)	丈六仏開眼[上宮聖徳法王帝説裏書]	金堂・回廊の瓦補修 (7世紀後半)
文 武 3年 (699)	30年を限り300戸の封戸を賜う[扶桑略記]	南門・大垣建替え (7世紀後半)
大 宝 3年 (703)	33寺に齋を設ける	僧房・宝蔵建設 (7世紀後半)
天 平11年 (739)	石川年足、大般若経を浄土寺に納める	
		回廊内に瓦敷 (8世紀中頃)
		東北院の形成 (8世紀中頃)
		主要堂塔の補修 (8世紀後半～9世紀初頭)
承 和元年 (834)	僧正護命卒す。古京山田寺に引きこもる	
		宝蔵の建替え (9世紀中頃)
		大垣を築地に改修 (10世紀前半)
		回廊の改修 (10世紀後半)
		回廊内をバラス敷 (10世紀)
		東北院の廃絶 (10世紀には)
治 安 3年 (1023)	藤原道長が山田寺に参詣[扶桑略記]	
長 元 7年 (1034)	善妙、法華八講を修す	回廊・宝蔵倒壊 (11世紀前半)
嘉 保 3年 (1096)	多武峯浄土堂の鐘と交換[多武峯略記]	
文 治 3年 (1187)	興福寺東金堂衆、山田寺講堂の丈六仏を奪いさる[玉葉]	金堂・塔・南門・講堂焼失 (12世紀末)
承 久 8年 (1197)	堂塔・僧房・鐘楼・経蔵等の跡あり [多武峯略記]	
		旧講堂跡地に本堂再建 (13世紀初)
		梵鐘铸造遺構 (13世紀後半)
		北面回廊の南方に井戸群 (13～14世紀)
弘 安 2年 (1279)	多武嶺寺と相論	
元 禄15年 (1702)	本堂建築	
明 治30年 (1955)	現本堂再建	

岡 寺

年 代	古 記 録	発 掘 成 果
天 平12年 (740) 15年 (743)	岡寺本を写経する[正倉院文書] 興福寺が岡寺の経典を借りる [律論疏集伝等本収納并返送帳]	本堂下層と治田神社に建物 (7世紀末～8世紀初頭)
天平宝字6年 (762)	越前国の戸50畑を施入	如意輪観音坐像 (8世紀末～9世紀初)
貞 観10年 (868)	最勝会の立義僧は龍蓋寺ほか夏安居の 講師経験者から選出することを定める[応 最勝会立義得第僧等請用諸寺安居講師事]	治田神社の基壇建物改修 (9世紀)
長 保2年 (1000) 平安後期	岡寺別当の選出[権記] 厄年の信仰が高揚する	龍蓋池はすでに存在 (9世紀末)
建 保4年 (1216)	本尊と三重塔が存在[諸寺建立次第]	石室が開口信仰施設に転用 (13世紀) 龍蓋池が縮小 (13世紀中頃)
弘 安6年 (1283)	興福寺と多武峯の争いで岡寺付近が焼失 [勘仲記]	
文 明4年 (1472) 5年 (1473)	大風で塔が倒壊[大乘院日記] 塔の再建が行われるが、未完成 [大乘院寺社雑事記]	
慶 長17年 (1612) 慶 長年間 (1596～ 1614)	仁王門建立塔の古材を利用 楼門建立塔の古材を利用 書院建立	
文 化2年 (1805)	現本堂建築	

坂 田 寺

年 代	古 記 録	発 掘 成 果
継 体16年 (522)	司馬達等が坂田原に草堂を建て、本尊を 安置 (扶桑略記)	
用 明2年 (587) 推 古14年 (606)	鞍部多須奈が出家し仏像と寺を造った 鞍作鳥が近江国坂田郡の田20町を賜り、 金剛寺の造営に当てた	伽藍創建・素弁蓮華文軒瓦 (7世紀初) 伽藍造営・素弁蓮華文軒瓦 (7世紀前) 石組溝・方形池 (7世紀前半) 伽藍造営・坂田寺式軒瓦 (7世紀中頃) 土坑・溝 (7世紀後半) 伽藍補修・山田寺式軒瓦 (7世紀後半)
朱 鳥元年 (686)	天武のために五大寺 (大官大寺・飛鳥寺 ・川原寺・豊浦寺) で無遮大会を設ける	伽藍補修・藤原宮式の軒瓦 (7世紀末～8世紀初頭)
天 平9年 (737) 天平勝宝元年 (749)	信勝尼が経典を内裏に進上する 東大寺大仏殿東脇侍を寄進	金堂建築 (8世紀前半) 北方で井戸・溝 (8世紀中頃) 西方建物 (8世紀前半) 金堂須弥壇改修 (765年以降) 講堂・回廊等造営 (765年以降)
延 久2年 (1070) 承 安2年 (1172)	寺田の記述[興福寺大和国雑役免坪付帳] 多武峯末寺となっている	北方井戸の改修 (9世紀前半) 伽藍倒壊 (10世紀後半)
		水田 (15世紀)

立 部 寺

年 代	古 記 録	発 掘 成 果
		素弁11弁蓮華紋の軒瓦（7世紀初頭） 川原寺式軒瓦（7世紀後半） 藤原宮式軒瓦（7世紀末～8世紀初頭） 伽藍修理（13世紀）

檜 隈 寺

年 代	古 記 録	発 掘 成 果
朱 鳥元年（686） 永 正14年（1517） 明 和9年（1772） 明 治40年（1907）	軽寺・大窪寺と共に30年を限り封戸が与えられる 高市郡檜前郷に道興寺あり[清水寺縁起] 十三重石塔のみある[菅笠日記] 於美阿志神社が移転	7世紀前半の瓦出土 金堂・西門の造営（7世紀後半） 講堂・塔の造営（7世紀末） 平城宮同范瓦で補修（7世紀後半） 講堂補修（11～12世紀） 十三重石塔建立（11～12世紀） 金堂廃絶（12世紀） 土坑・小穴（12世紀後半） 講堂廃絶（14～15世紀） 講堂基壇上に仏堂（15世紀）

呉 原 寺

年 代	古 記 録	発 掘 成 果
崇峻辛亥年（591） 康 平元年（1058）	坂上大直駒子が呉原寺（竹林寺）を創建したとする （大和国竹林寺別当譲状） 興福寺別院竹林寺が高市郡呉原にあり、西大門の地名を残すのみで伽藍はない。 [大和国竹林寺解案]	横見廃寺式軒丸瓦出土。この頃創建か（7世紀中頃～後半） 飛鳥寺式XV型式出土。（8世紀初頭） 溝検出（8世紀中頃） 6282型式出土（8世紀後半） 柱列（9世紀末～10世紀初頭）

	西暦	飛鳥宮	小墾田宮	嶋宮	飛鳥寺	川原寺	橘寺	豊浦寺	奥山廃寺	山田寺	岡寺	坂田寺	立部寺	檜隈寺	吳原寺
古代Ⅰ 古代Ⅱ	600														
	700	694 遷宮 官衙移建 710 平城遷都 8C中 外郭廃絶			702 藤原京四大寺 718 平城移建 8C前 回廊内瓦敷 8C前 北内濠埋没 8C中 西内濠埋没始まる 9C初 北面大垣倒壊	702 藤原京四大寺 8C前 北辺で双倉 8C末 北限で工房 9C後 落雷で焼失	8C 塔改修・講堂 北門 756 嶋の水田を寄進	8C前 瓦敷改修 763 寺封を得る 8C後 玉石敷	8C 回廊内瓦敷 750 小治田禪院 763 50戸施入 8C末 墨書土器	8C中 瓦敷・東北院 740 写経実施	7C末 創建建物 8C前 金堂創建 737 經典進上 749 脇侍を寄進 765 回廊建築 8C後 須弥壇改修 9C前 井戸改修 868 安居実施	7C末 伽藍整備			8C初 改修 8C中 溝 8C後 改修
古代Ⅲ	800		760 淳仁行幸 765 称徳行幸 8C末 小治田墨書 9C中 井戸埋没	756 水田を橘寺に寄進											
	900	9C 苑池埋没始まる													
古代Ⅳ	1000														
	1100			11C 木棺墓	11C 内濠埋没										
中世Ⅰ	1200	12C 苑池埋没		12C後 方形池埋没	12C後 伽藍倒壊 1196 伽藍焼失	12C後 西方に井戸・環濠 1191 伽藍焼失 13C 伽藍再建	1203 塔再建 13C 瓦窯・北門	12C 講堂廃絶 13C初 仏堂再建 13C 石組池	13C 十三重石塔	1187 伽藍焼失 13C初 本堂再建 13C後 梵鐘鑄造				12C 講堂改修 12C 十三重石塔 12C 金堂廃絶	
	1300	13C 水田化		13C 建物・溝 13C 水田(東橘)	13C 北部で井戸・柱穴	13C 西方に建物									
中世Ⅱ	1400			15C 水田(東橘)	1436 大仏覆屋撤去										
	1500						1497 焼失 1506 焼討ち	1497 焼失							
中世Ⅲ	1600					16C前 伽藍焼失		16C 東部は水田							
	1700			17C 水田(東橘)	1632 仏堂建築	1684 前身本堂建築									
近世Ⅰ	1800						1776 観音堂建築			1702 本堂建築					
	1900				1825 安居院建設	1840 本堂建築	1835 伽藍大修理 1865 菩提寺造立				1612 仁王門 17C初 楼門・書院 1805 本堂建築				
													1907 於美阿志神社		
										1955 現本堂再建					

飛鳥地域の遺跡変遷表

檜隈寺（道興寺）

檜隈寺は南北に延びる尾根上にあり、現在、伽藍地には東漢氏の阿知使主を祭神とする於美阿志神社の社殿がある。社殿の南東には平安時代後期の十三重石塔が塔跡の上に建てられている。檜隈寺の創建に関する記録はみられないが、『日本書紀』朱鳥元（686）年に「檜隈寺・軽寺・大窪寺に各百戸を封ず。30年を限る」という記事があり、この頃には檜隈寺が存在していたことがわかる。

発掘調査では7世紀後半に金堂が造営され、7世紀末に塔・講堂が造営されたことが判明している。しかし、伽藍地や講堂基壇内からは7世紀前半に遡る瓦も出土しており、この頃まで遡る仏堂があった可能性もある。

奈良時代には平城宮と同範瓦が出土することから、8世紀後半には中央と密接な関係を持っていたことがわかる。

11～12世紀には、講堂基壇を玉石積みによる補修が成されるが、金堂はこの頃に廃絶し、塔も廃絶している。ただ、塔跡には十三重石塔が建てられており、四耳壺の中の青白磁合子などの奉納物が埋納される。

14～15世紀になると唯一残されていた講堂も廃絶し、15世紀に講堂基壇上に小規模な仏堂が建てられるようになる。永正14（1517）年には『清水寺縁起』によると高市郡檜前郷に道興寺があったと記されており、この頃には檜隈寺が道興寺とも呼ばれていたことが分かる。

仏堂の廃絶は明らかではないが、明和9（1772）年の『菅笠日記』では十三重石塔のみがあるとされており、18世紀後半には仏堂も亡くなっていた。現在のように寺跡に於美阿志神社が遷ってきたのは明治40（1907）年になってからのことで、それまで神社は道の西にあったといわれている（飛鳥資料館1983・花谷2000a・2003）。

呉原寺

呉原寺は檜隈寺の東方の丘陵上にある。伽藍の位置については明確ではないが、丘陵部の畑地となっている。

呉原寺の創建については明確ではないが、保延5（1139）年の『大和国竹林寺別当譲状』には崇峻元（591）年に坂上大直駒子が建立したとされる。また、『清水寺縁起』では敏達天皇のために坂上大直駒子が建立したとする。いずれにしても「竹林寺」は呉原寺の後身寺院か法号と考えられ、渡来系の東漢氏の氏寺ということになる。記録に現われる初出は、康平元（1058）年の『大和国竹林寺解案』において呉原寺西大門という地名が残されているのみと記されている。

発掘調査では伽藍そのものを確認していないが、礎石の遺存や瓦の出土から、およその位置が確認されている。出土する瓦からは横見廃寺式の軒瓦が最も古く、7世紀中頃～後半頃に創建されたものと考えられるが、先の記録とはややズレがある。次に8世紀初頭と後半の軒瓦が出土し、この頃にも伽藍の造営が続いていたか、改修が施されていたことが推測される。推定寺域の西端ちかくには7世紀末から8世紀中頃の土器を出土する溝が検出されており、土器構成からみて日常生活にかかわるものが多い。よって食堂院や僧房などが近在に推測される。また尾根をやや下った位置に建物あるいは柵が確認され、9世紀末から10世紀初頭に属する。これ以降、遺構はみられず、先の『大和国竹林寺解案』によると、康平元（1058）年には西大門は地名を残すのみと記されている。さらに高市郡呉原条は12世紀には興福寺領となって荘園化し、現在は竹林寺がその管理にあたっていたと考えられる（網干1977・檀考研2000）。

D. 神 社

飛鳥地域では、いくつかの神社が記録にあがるが、その実態は明確ではない。この中に飛鳥坐神社がある。『日本書紀』によると朱鳥元（686）年に天武天皇の不予に際して、紀伊国の国懸神・飛鳥四社・住吉大社に奉幣が行われた。この飛鳥四社が高市郡賀美郷甘南備山に鎮座した飛鳥社である。淳和天皇の天長6（829）年に神託によって鳥形山、つまり現在の地に移されたとされる。その後、長らく記録から消えるが、江戸時代の享保10（1725）年に社殿が焼失、天明元年に再建されている。発掘調査では、江戸期の本殿・拝殿が確認されるが、この造営が大規模なものであったとみえて、これ以前の遺構は検出されなかった（明日香村2000）。西から飛鳥坐神社へと向かう参道は、江戸時代の絵図にも記されており、平安時代以降に作られたものであろう。飛鳥寺の境内地の規模縮小と関係しよう。

E. 中世山城

飛鳥地域には中世の山城と推定される遺跡が数多く存在する。当時、この地域を支配していたのは越智氏であり、その拠点には越智城と貝吹山城であり、高取城であった。奈良県遺跡地図には明日香村内に10箇所以上の中世山城が記載されているが、その多くは地元土豪層の砦と考えられる小規模なものである。唯一、小山城が国民小山氏の居館を伴った環豪集落と考えられている。

明日香村内にあるこれらの中世山城は、現地地形からその縄張りを復元しているものが多く（村田1978・藤岡2001）、ほとんど発掘調査がなされておらず、その実態は不明である。

小山城は越智氏傘下の国民小山氏の居城である。小山氏は文明10（1478）年に興福寺東金堂と十六町の地を争ったが、そこは「越智之少山殿ノ前」にあった。現地地形から推測すると、小山城は丘の東裾に居館を内郭とし、さらに南と東に並ぶ民屋を外堀で囲む環豪集落をもつ。

奥山城は奥山集落の東の丘陵上にある。15m四方の主郭の東西北に堀切を設け、土塁を巡らす。さらに堀切の東方には広場があり、両者は溝で結ばれている。また、この南斜面に縦堀がある。この構造から、単郭から復郭に変化したものとも推定されている。

ギョ山城は小山の南800mの丘陵上にある。現地地形から25m四方の方形の主郭と北と西に堀切をもつ。南に帯曲輪を巡らす。

雷城は記録にはまったく現われないが、平成17年に発掘調査が実施されている。そこでは頂部に地山を削りだした約25m四方の主郭と、その西に空堀を隔てて東西20m、南北8mの副郭がある。両者の間には土橋状の削りだしがある。北と東に帯曲輪を設けている。郭内には削平のため柱穴等はまったく確認できず、郭内の状況は不明である（奈文研2006a）。

飛鳥城は飛鳥氏の城とみられるが、明確ではない。現地地形を見る限り、一辺50m程度の方形の地形の丘陵上に、20m程度の主郭があり南と北側に空堀がある。飛鳥城そのものの発掘調査は実施されていないが、東裾にあたる飛鳥北垣内遺跡で瓦器の出土する溝や土坑・ピットが確認されているので、丘陵上だけでなく、周辺地にも関連遺構が広がっている可能性が高い（明日香村2000）。

岡城の城主は明らかではない。現地地形から15×25mの方形の主郭を中心とし、東側に堀切、北と西に帯曲輪を巡らす。

祝戸城は15×20mの不整形な主郭の北側に三段の曲輪をもつ。現地地形からみて、空堀は主郭の南と西側に堀切が、北側に5条の縦堀がある。

野口吹山城は野口集落の西端にある。集落南西部に字「トノガヤシキ」の地名が残る。主郭の北側には堀切を設け、さの北側は土塁となる。帯曲輪は西と南側にある。

野口植山城は野口集落の北端に位置し、城主は不明。鍵穴形の主郭の東と西側に堀切を設け、帯曲輪は北と南側にあり、特に、南側では数段に及ぶ。

ほかに八釣城・冬野城などが遺跡地図記載されているが、実態はまったく分かっていない。

F. 墳墓

飛鳥時代には飛鳥周辺部において後期から終末期古墳が多く築かれていた。当然飛鳥中心部ではみられず、飛鳥の南西地域に集中する。奈良時代になると、都が平城京に遷ると共に、これらの墳墓も急激になくなる。このような中、飛鳥時代以降の墳墓が飛鳥地域でもいくつか見つかっている（黒崎1980）。

甘檉丘では頂上の展望台より南にやや下がった所で、火葬墓が見つかった。不治発見のため、詳細については不明だが、瓦のようなもので囲った中に、木炭が充満していたという。この中に須恵器壺の骨蔵器があり、さらに中には火葬骨と和同開珎1枚が副葬されていた。須恵器の形態や銭貨からみて、奈良時代中頃のものと思われるが、この頃すでに甘檉丘において墳墓が築かれていたことは重要で、喪葬令の規定にある「皇都及び、道路側近並び葬埋を得ず」の記載とも関連し、すでに都で無くなっていたことを示している（網干1966）。また、飛鳥の東北に位置する上の**井手遺跡**で、小穴の中に納められた奈良時代末の土師器把手付壺がある。壺の中には和同開珎・神功開宝・万年通宝など30枚と骨細片が納められており、骨蔵器と考えられる（奈文研1973）。

平安時代になると、甘檉丘の北麓にある**平吉遺跡**で、9世紀前半の木棺墓がある。墓壇内に木槨を設置し、この中に木棺を据える。副葬品には土器や石帯・砥石・冠漆箱がある。当時、この地域に本貫地をもつ官人の墳墓であったことが想像される（奈文研1978）。また、**水落遺跡**でも平安時代の合口土器棺墓が検出されている。甕を2個体合わせ、横にして埋設している。棺内には土師皿が1枚だけ出土し、他にはない（奈文研1997）。**鳥庄遺跡**では11世紀の瓦器椀と刀子を副葬する墳墓がある。墓壇内に木棺を据えたもので、墳丘の有無は明らかではない。近接して同様の土坑が複数確認されており、古代末～中世の墳墓群であった可能性がある（奈良県1974）。

なお、飛鳥近郊では、香具山南東麓の**興善寺跡**の丘陵上で、8世紀後半の火葬墓と13～15世紀の火葬墓群が多数見つかっている。出土遺物に青磁椀や中国龍泉窯系の磁器などがあり、帰属・有力武士・有力社寺層などの上流層との関係が伺われ、叡尊によって再興された興善寺の影響が説かれている（橿原市千塚資料館1991・1994）。

このように飛鳥地域における墳墓の造営は決して数は多くないが、各時代にわたって営まれていたことがわかる。

一方、陵墓については、奈良時代から平安中期までは、適切な管理が成されており、時々幣帛を行ったり、山陵遣使が派遣されていた。こうした中、平安後期の康平3（1060）年には推古陵が盗掘されたことが『扶桑略記』に記されており、康平6（1063）年には興福寺の僧によって成務陵が盗掘を受けている（『扶桑略記』）。また、長承2（1149）年には聖武天皇陵がやはり興福寺の僧によって盗掘を受け（『本朝世紀』）、そして文暦2（1235）年にはついに天武持統陵が盗掘を受け、その詳細な見聞記録は、現在では実見不可能な天皇陵の内部を克明に

記している（『帝王編年記』『明月記』『阿不幾乃山陵記』）。なお、天武持統陵については正応6（1293）年にも盗掘を受けていることが『実躬卿記』によってわかる（田中2001）。このような墳墓の盗掘は、発掘調査でも確認されており、そのうち盗掘の時期の分かるものを概観してみる。高松塚古墳は、出土土器からみて、奈良時代に周溝が埋没しはじめることがわかり、12世紀後半には墳丘の一部が削平、畑地になっていく。ほぼ同時期に石室が盗掘を受けている（奈文研2006b）。同じ頃キトラ古墳でも石室内の出土土器に鎌倉時代の土器があり、盗掘がこの頃にあったと推定できる。一方、マルコ山古墳はやや遅れて、鎌倉～室町時代初めに盗掘を受けており、墳丘の南側が水田になるのもこの頃である。岩屋山古墳も中世には石室内の2次利用として墓が造られている（岩屋山古墳環境整備委員会1980）。牽牛子塚古墳も中世に盗掘を受けており（明日香村1977）、束明神古墳も中世に盗掘を受けていることが推定される（河上1999）。

このように発掘の成果から古墳の盗掘時期は12～13世紀に集中しており、先の天皇陵盗掘の時期とほぼ重なる。まさに11世紀から13世紀にかけては動乱の時代であったと言っても過言ではない。

G. 道路

飛鳥地域における7世紀代の道路網については、発掘調査によって断片的に検出されている。このうち、同一路線で複数カ所の地点で道路側溝が確認されているものには、川原寺と橘寺の間を東西に敷設された東西道路がある。道路幅12mで、東は飛鳥宮から西は下ツ道まに接続していたと考えられる。作られた時期は7世紀中頃と推定される。この他にもいくつかあるが、基本的に寺院の周囲や宮殿の周囲に設けられていた（相原1998・1999b）。

一方、飛鳥周辺の古道としては下ツ道と山田道がある。下ツ道は後の平城宮朱雀門から一直線に南下し、橿原市の丸山古墳まで道路幅約24mで伸びている。下ツ道は考古学的にその設置時期は特定できないが、側溝の下層から出土する土器は7世紀後半から8世紀初頭のもので、この頃には存在していたのは間違いのない。しかし、築道時期をここからどれほど見積もれば良いかは分からない。ただし、下ツ道に隣接する調査で、7世紀前半の方位の振れた建物群が確認されており、少なくとも、7世紀中頃に直線道路としての整備時期を推定するべきであろう。また、山田道は桜井方面から阿部・山田を通過し、東西道路となり、雷丘の間を通過して、下ツ道に接続することが推定されており、現在も道路として残る。この山田道の路面でも7世紀前半の方位の振れた建物があり、やはり、この場所での直線道路への整備時期は7世紀中頃と考えられる。側溝の下層から出土する土器は7世紀後半から8世紀初頭のものである（相原1993）。

奈良時代になっても飛鳥地域の道路網に大きな変化はなかったと考えられる。考古学的にこの時期の道路は証明されていないが、寺院はいずれも存続しており、飛鳥宮の外郭施設は奈良時代中頃まで存続することから容易に推定できる。橘寺前の道路側溝からは「天平10年」の木簡も出土しており、これを裏付けている（明日香村2000）。なお、藤原京の条坊道路の多くは、平城京遷都と共に、一部を除いて埋め戻されている（川越2000）。

平安時代の道路網については明確ではない。飛鳥時代の道路がどこまで存続しているかを確かめられないが、寺院は未だ健在で、比較的踏襲されていたのであろう。下ツ道の側溝は10世紀頃には完全に埋没し、道路幅も減少していたことが分かっている。

鎌倉時代以降、道路網に変化がみられたと想像できるが、明確な根拠はない。そして、近世になると絵図や地誌・日誌、そして道標が多く残されており、この頃の道路網の復元は比較的容易である。この復元を手がけたのは和田萃氏で、これは、ほぼ現在の状況と変わらない(和田1988)。

H. 条里と地割

飛鳥地域の盆地部には、ほぼ正方位の地割がみられる。これは大和国に形成された統一条里地割の延長部に位置するものとされている。『大和国条里復原図』によると、いわゆる山田道以北には、明瞭な条里地割が残されており、以南においてはいくつか方格地割がみられるが、明確に条里地割とは認められていない(檀考研1980)。これは高橋誠一氏の検討においてもわかるように、地割寸法に違いがみられること、特に、島庄地域では106mの方格地割が認められるとする(高橋2006)。ただし、古記録による坪付図などにはこの地域にも条里呼称があったことが知られており、あくまでも山田道以南、つまり高市郡路東二十九条以南においては、条里地割の延長が敷かれていたと推定される。

では、その大和国統一条里の形成時期であるが、現在最も有力と考えられるものは、平城京以前の7世紀後半から末にかけてにものと考えられている(井上1994)。藤原京条坊遺構は、平城京遷都と共に、基本的にその機能を停止しており、奈良時代には条里地割がその上を覆うことになる。天平勝宝8(756)年には藤原京内にある飛弾庄が東大寺に寄進されていることから、8世紀後半には旧藤原京域に水田景観が広がっていたことがわかる。同じ年、嶋宮の水田も橋寺に寄進されることから、嶋宮にもすでに水田景観があったことが伺われる。さらに760年に行幸した小治田宮は条里地割に規制されていることから、山田道以北の条里地割は8世紀前半に施行されたことが推定される。よって、飛鳥地域も基本的にはこの頃に条里地割が施行されたと考えられるが、奈良時代の飛鳥ではこれまでみてきたように、盆地の内部に寺院等の諸施設が密集している。当時の諸施設の配置とも、方格地割の形成は関わってくると思われる。そこで、飛鳥地域の諸施設と遺存地割の関係についていくつかみていきたい。

飛鳥宮では東外郭の位置が岡寺山の裾を南北に通過する道路とほぼ一致している。この外郭の廃絶は奈良時代後半とされるが、これに面した道路は長く使用されていたことが考えられる。また、苑池遺構については南池の輪郭や水路の東にある南北の島状地形は明瞭に認められる。苑池の埋没は9世紀に始まり、12世紀には窪みになっていたことがわかる。これと同様に島庄遺跡の方形池も12世紀には完全に埋没するが、水田の畦半が周囲とはことなる方向で明確に残されている。

飛鳥寺では、旧寺域を画する四辺のうち、北・西・南辺では、道路或いは水田畦が残されている。北辺では東西道路が八釣まで直線に伸びており、寺辺に沿っての道が残されたものと考えられる。西辺も同様である。南面大垣の位置は水田畦であるが、さらに南の斜めの石敷道路位置には、現在でも斜めの道路が遺存する。このように寺辺の遺構は遺存地割として良好に残されており、その廃絶時期は、南大門が平安時代末であることを除いて、奈良時代後半から平安時代と推定され、周辺条里施行時期よりも後出することになる。なお、寺域内を東西に貫通する道路は、飛鳥坐神社との関係で考えるべきである。また、坂田寺の伽藍も周囲とは異なる地割として明確に残っており、さらにその北と西にも同じ方向の地割が残る。この地割が残されている範囲が、坂田寺の旧境内地とも推定されている。伽藍は奈良時代の坂田寺であるが、

その倒壊は10世紀後半で、地割はこれを反映している。

このように、飛鳥地域に残る宮や寺院の外郭施設は、現在の地割として明瞭に残る部分が多い。これは遺構の存続時期とも関連し、少なくとも奈良時代後半から末までの遺構が、条里とは異なる地割として遺存することは、飛鳥地域における条里（類似）地割の形成時期については、これよりも早い時期に施行されたと考えられるが、あくまでも条里の延長であり、条里地割そのものではない。さらに既存施設がすでに存続しており、この地域では、旧来の区画施設が、後の遺存地割に反映されている特殊な状況であったと考えられる⁽¹⁾。

Ⅳ. 飛鳥の景観の動向

これまで各遺跡の動向をみてきたが、ここでは全体を通した歴史動向を俯瞰しておきたい。1300年の歴史の中には、いくつかの画期を抽出することができる。

古代Ⅰ期（西暦694年～710年）：藤原京（新益京）遷都（694年）を画期とする

飛鳥地域において宮殿が飛鳥浄御原宮から藤原宮に遷ることは極めて大きな画期となった。「新城」あるいは「新益京」と呼ばれていた藤原京の造営は、これ以前の天武5年に遡るが、山田道以北では条坊道路が施行されている。天皇の宮殿は694年に遷るが、飛鳥浄御原宮内外にあった官衙については、この年に一度に移ったわけではなく、飛鳥Ⅴの土器編年の中で、つまり、710年までに随時遷っていったものと推定される。この時期、飛鳥の寺々でも藤原宮式の瓦が出土しており、橘寺の塔の改修や檜隈寺の講堂・塔の造営、立部寺・坂田寺の造営や改修が依然続いていた。また、岡寺はこの頃に創建される。

いずれにしても天皇が飛鳥から離れることは、この地域において極めて重要な出来事であり、官衙・邸宅の藤原京への移動にも大きな影響を及ぼす。

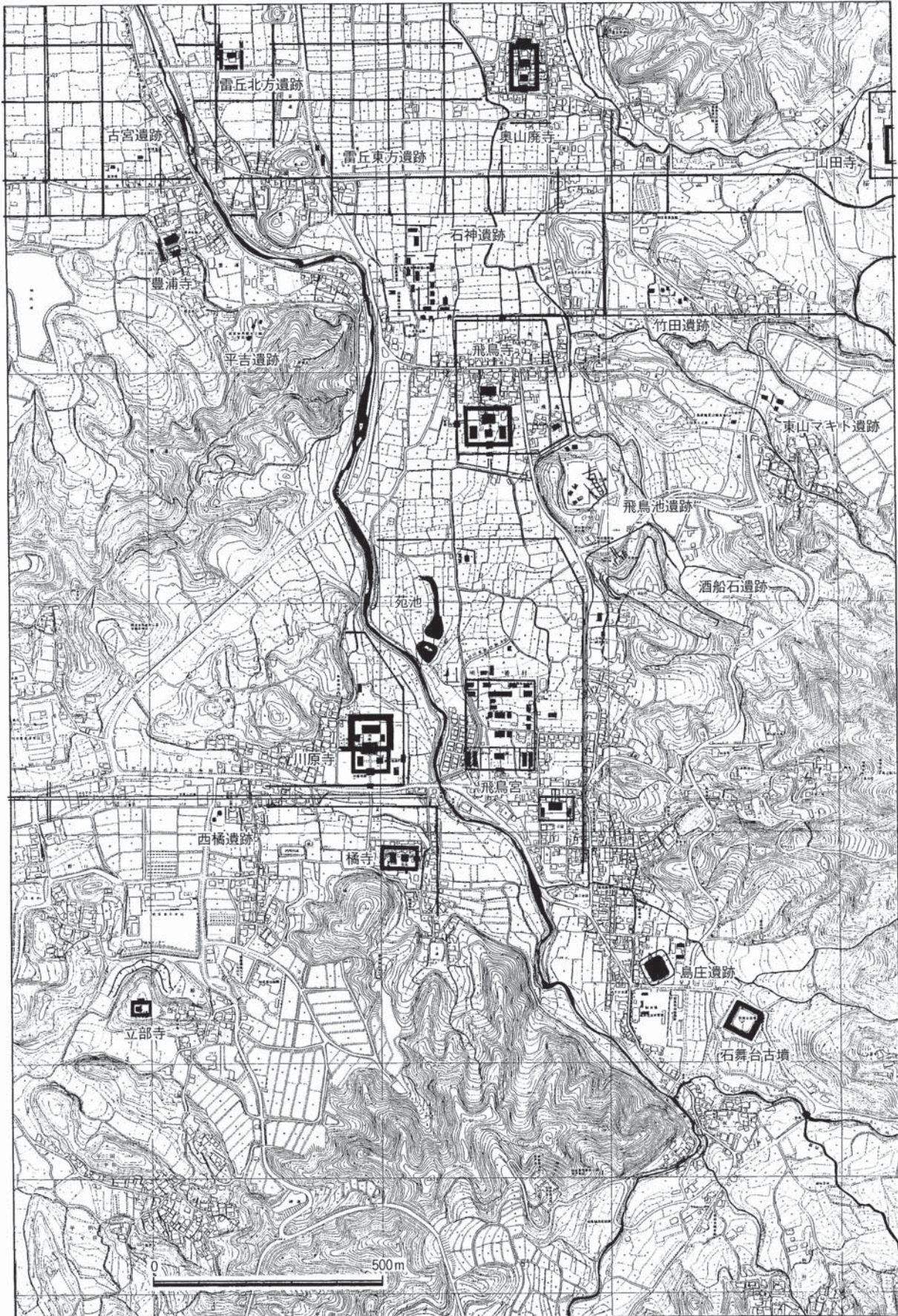
古代Ⅱ期（西暦710年～760年頃）：平城京遷都（710年）を画期とする

藤原京への遷都における影響は、710年の奈良平城京への遷都によって、益々加速度を増すことになる。飛鳥宮の跡地はすでに官衙群もなく、綺麗に整地され、塀によって囲まれた空間となっている。この状態は平城Ⅲまで継続しており、宮跡の地として古代Ⅱ期には嚴重に管理されていた。ただし、苑池遺構については存続するが、やはり適切な管理がなされていた。この頃に小治田宮が造営され、その地割が条里地割と合うことから、条坊を廃して条里施行がなされたと考えられる。

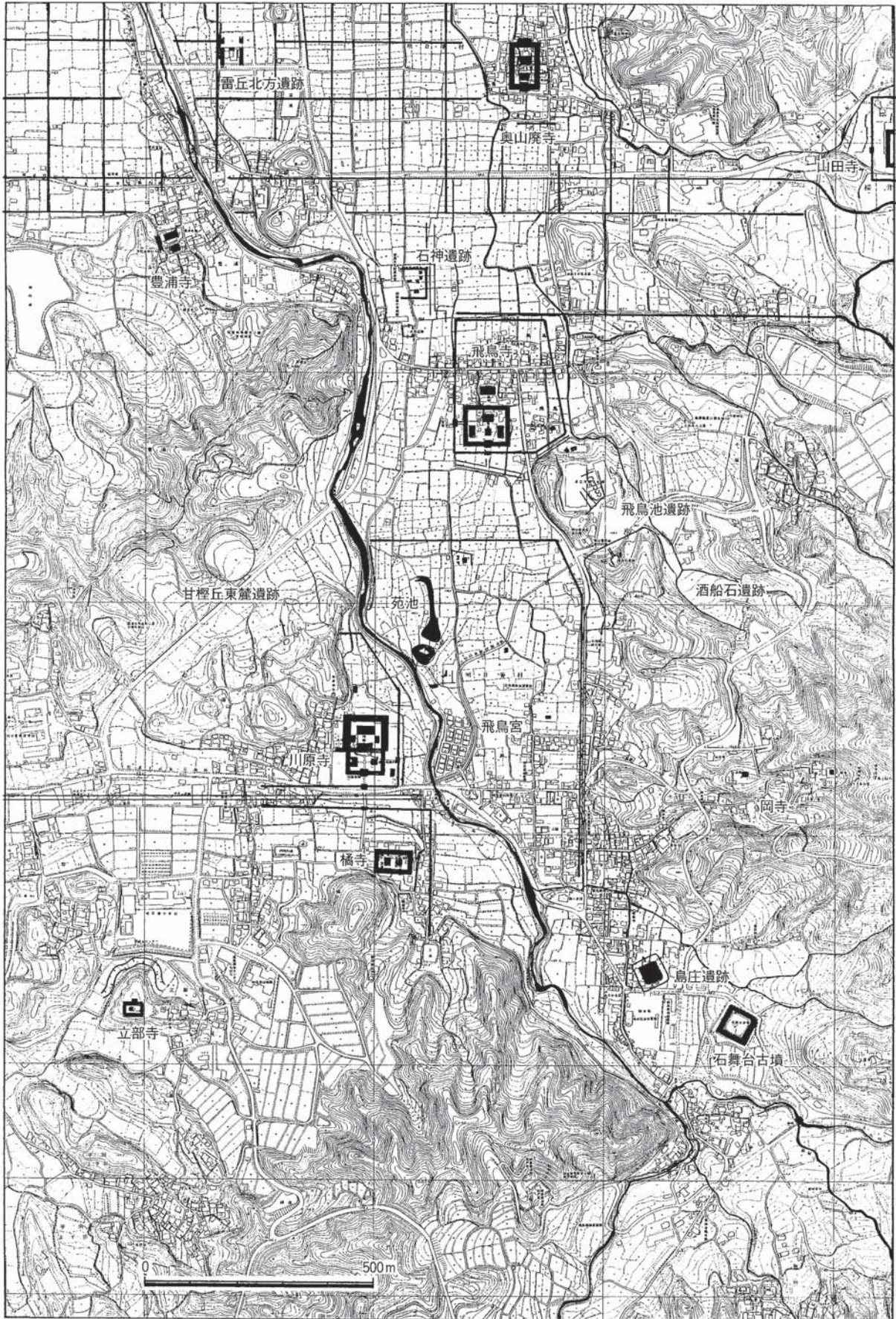
各寺院については、この時期にも存続するが、飛鳥寺は元興寺として718年に平城京へと移る。平城京に法灯が移ったといっても、飛鳥でも本元興寺として多くの施設は残されたままである。藤原京内の寺院が平城京遷都と共に奈良へと移ったのに対して、飛鳥にあった寺々はその多くが残されたままである。その寺院も改修や修理が継続されており、写経なども行われていた。まだ往事の様相を保っていたのである。興味深いのは甘樫丘で火葬墓が営まれることで、都市としての意識が薄れていたことが伺われる。

古代Ⅲ期（西暦760年頃～900年頃）：天平宝字4年（760年）頃を画期とする

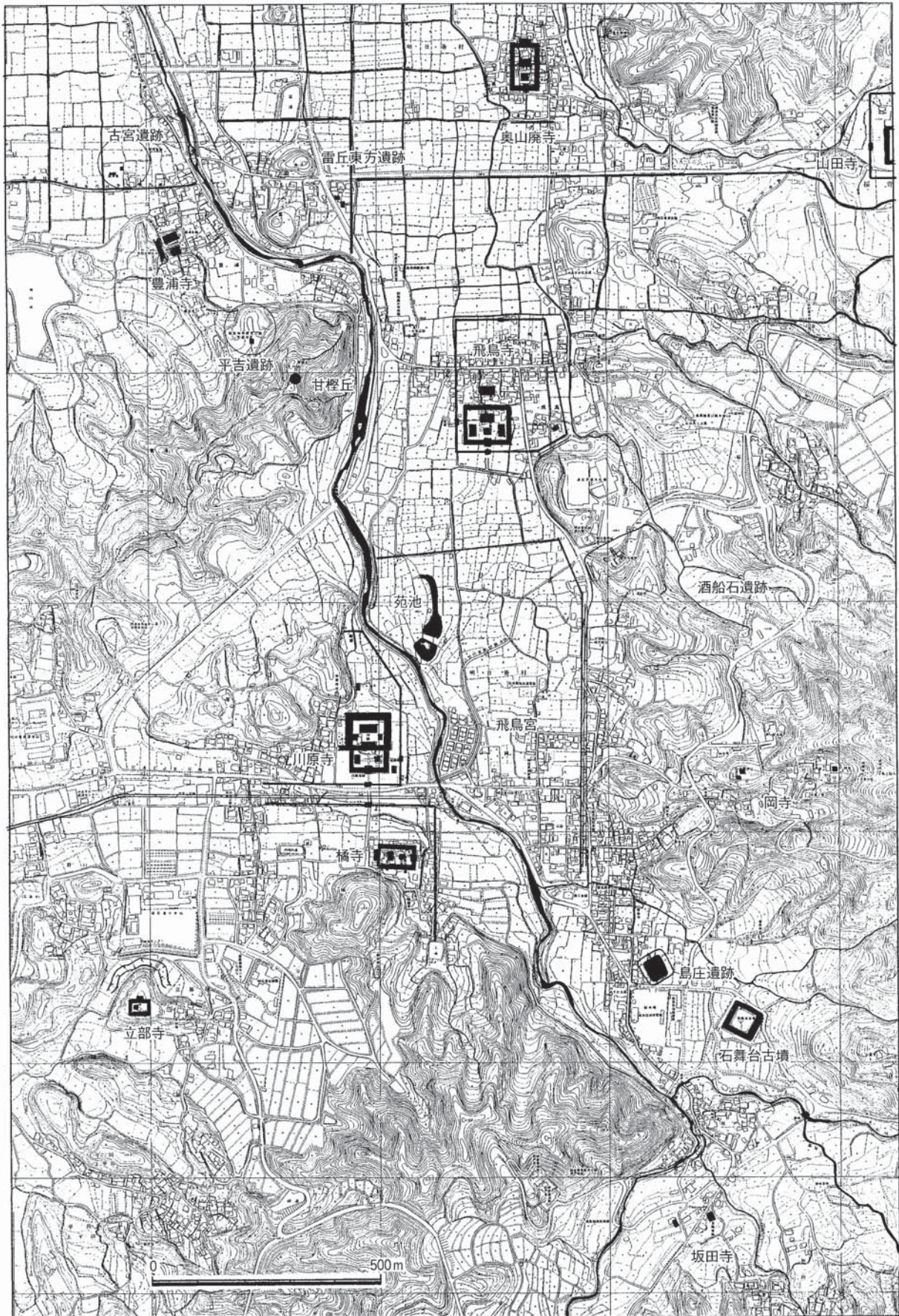
淳仁天皇は760年に小治田宮を改修し、5ヶ月にわたって滞在する。称徳天皇も765年に紀伊行幸に際して、小治田宮に2日間滞在し、小原・長岡・飛鳥川を臨した。この時の遺跡が雷丘



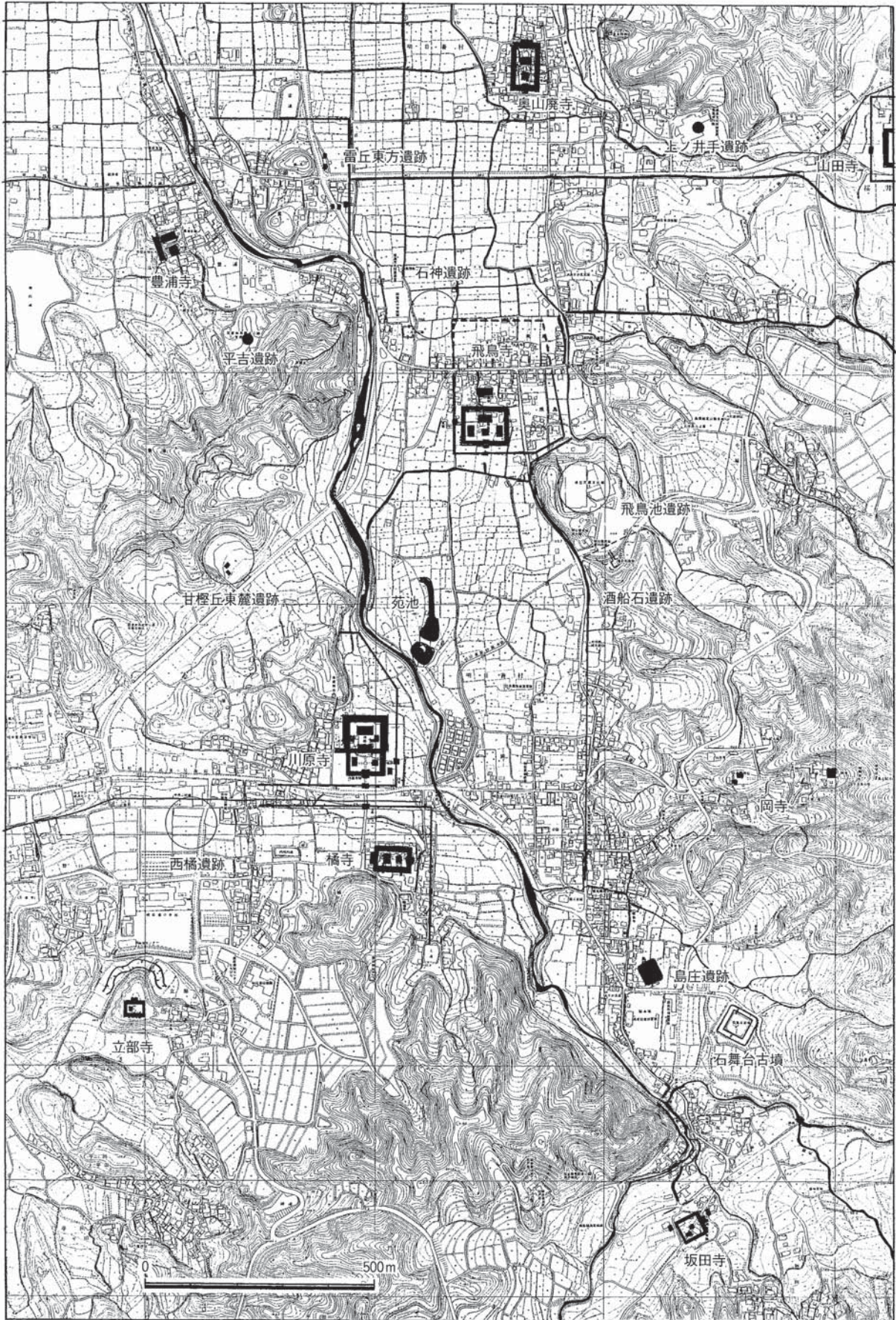
第1図 飛鳥地域の景観変遷図 [飛鳥Ⅳ：7世紀後半] (1:12000)



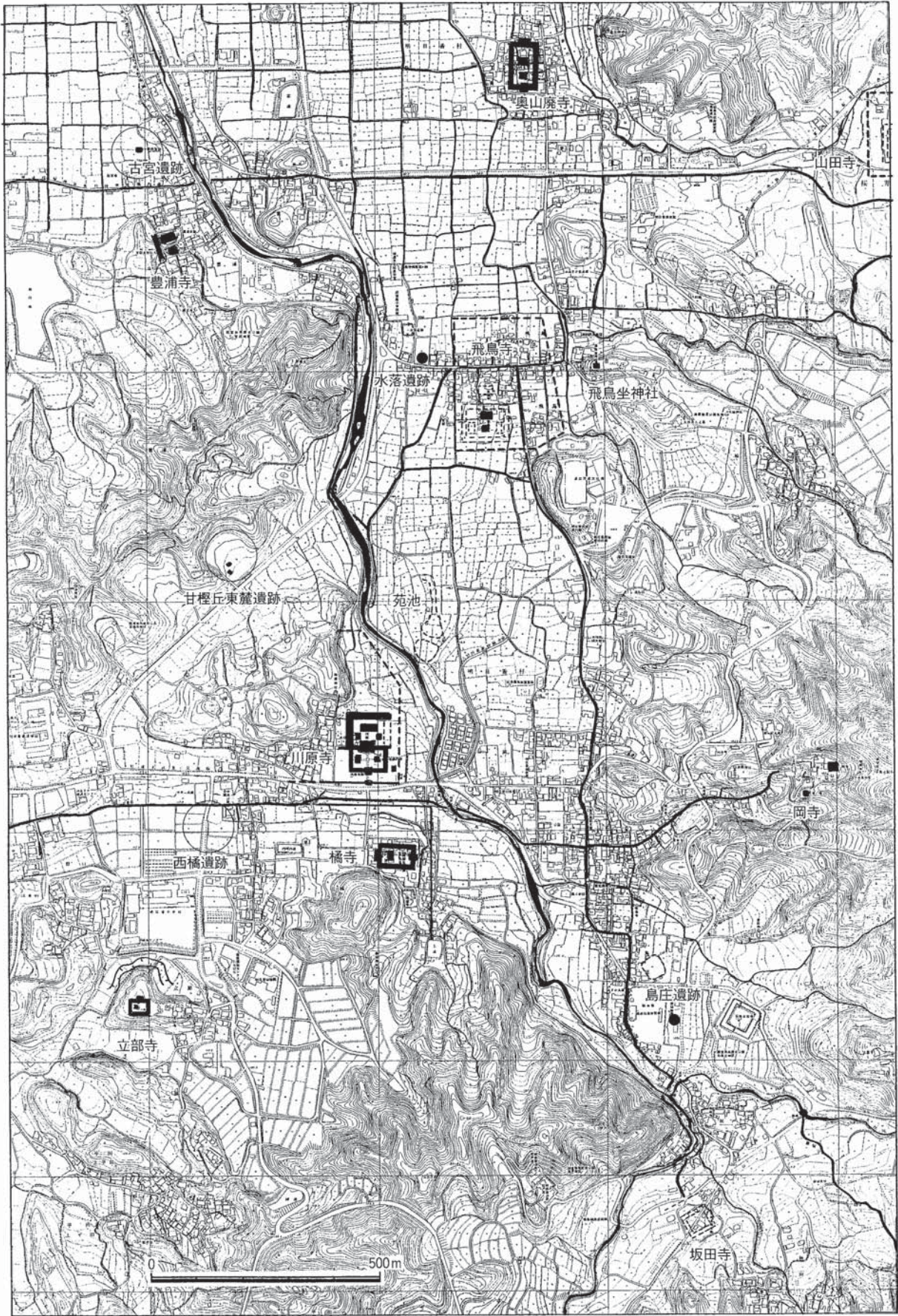
第2図 飛鳥地域の景観変遷図 [古代Ⅰ：694～710] (1：12000)



第3図 飛鳥地域の景観変遷図 [古代Ⅱ：710～760] (1：12000)



第4図 飛鳥地域の景観変遷図 [古代Ⅲ：760～900] (1：12000)



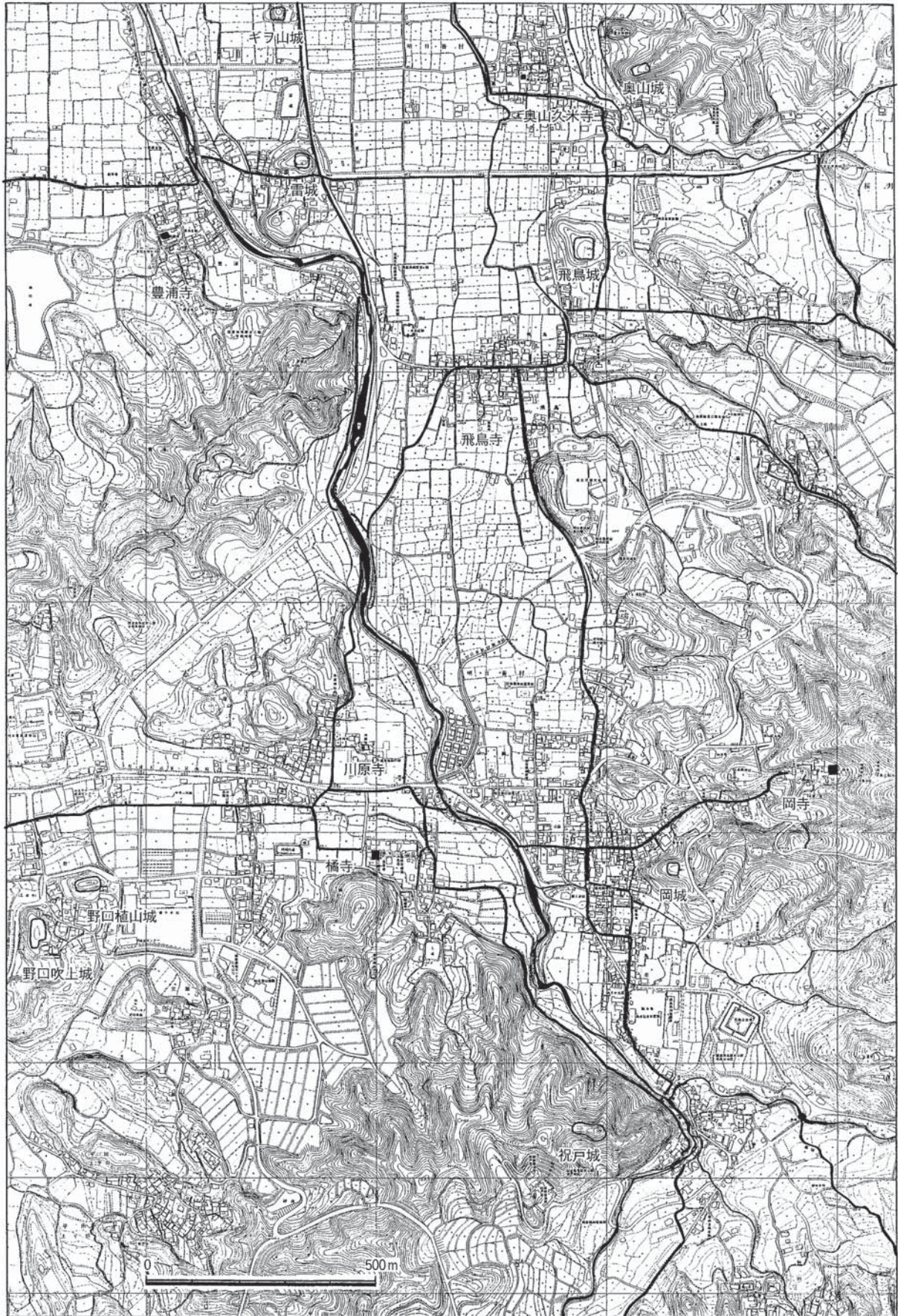
第5図 飛鳥地域の景観変遷図 [古代Ⅳ：900~1200] (1 : 12000)



第6図 飛鳥地域の景観変遷図 [中世I：1200～1350] (1：12000)



第7図 飛鳥地域の景観変遷図 [中世Ⅱ：1350～1500] (1：12000)



第8図 飛鳥地域の景観変遷図 [中世Ⅲ：1500～1600] (1 : 12000)



第9図 飛鳥地域の景観変遷図 [近世 I : 1600~1700] (1 : 12000)

東方遺跡・酒船石遺跡・飛鳥京苑池であると考えられている。小治田宮は9世紀中頃まで存続していたが、9世紀後半には機能を停止しており、苑池遺構や嶋宮の方形池も9世紀には管理が不十分（放棄）で、埋没がはじまる。いずれも760年前後に造営・改修や良好な管理がなされていたが、9世紀には荒廃がはじまっていた。このことは嶋宮の奴婢が東大寺に施入されたり、御田が橘寺に寄進されたりすることからも施設の規模縮小が伺われる。また、酒船石遺跡の亀形石槽もこの段階で完全に機能を停止する。

このような現象は寺院にもみられる。飛鳥寺は9世紀には北面大垣や西面外濠が埋没しており、大垣の廃絶は境内地の縮小を意味する。川原寺は8世紀代にはそれなりの格を保持していたが、9世紀後半には伽藍が焼失する。他の寺々は屋根の補修や伽藍の改修がみられているが、荒廃はまぬがれない。

これに対応するように、石神・水落遺跡・飛鳥池遺跡・西橋遺跡で集落が形成されていく。また、平吉遺跡や上の井手遺跡でも墳墓が確認できることは前段階と同様である。

古代Ⅳ期（西暦900年頃～1200年頃）：9世紀後半を画期とする

古代Ⅳ期は律令体制が崩壊していく段階である。大和国では元慶5（881）年を最後に、班田収授が行われなくなり、国府の正税から油田などの給付を受ける代わりに、田畠を決めて、租税を直接徴収する免田が実施される。中世荘園の一類型である。

遺跡をしてみると、9世紀末から10世紀初頭になると、多くの遺跡が埋没する。特に苑池遺構や島庄遺跡の方形池はこの頃から埋没がはじまり、すでに苑池としての機能はしていない。そして12世紀末には完全に埋没、窪みとなった状態であった。

この頃の寺院は、10世紀代には補修や改修がみられるが、坂田寺は10世紀後半に、山田寺は11世紀前半に土砂崩れによって回廊などが倒壊する。飛鳥寺でも西面内濠が埋没することから、西面大垣がなくなっている。このようにこの時期多くの寺が荒廃の一途をたどっている中で、岡寺は厄除け信仰などによって寺勢を保っていた。

中世Ⅰ期（西暦1200年頃～1350年頃）：1200年頃の伽藍焼失を画期とする

鎌倉幕府は興福寺に大和国に国司と守護の権限を与え、国司の支配から興福寺の支配下へと移った。この西暦1200年頃を中心として、多くの寺々が天災・人災に見舞われる。飛鳥寺は伽藍の多くが平安時代末には廃絶しており、残された中金堂・塔も1196年に落雷で焼失、川原寺の主要伽藍も1191年に焼失、山田寺も1187年に丈六仏を強奪されて焼失、橘寺も1148年に落雷で塔が焼失、豊浦寺は金堂・講堂が12世紀に廃絶、檜隈寺も講堂を除いて廃絶していた。このように1200年頃を前後する時期に、飛鳥の都市的シンボルであった寺院の伽藍が失われてしまう。その後いくつかの寺では堂塔が再建されたが、当初の面影をみるすべもない。

このような寺の廃絶・焼失に関わるように、旧境内地に中世集落が営まれはじめる。その実態は断片的なデータのみで全貌は明らかではないが、飛鳥寺旧境内地の北半に集落、川原寺旧境内地の西半で環濠や集落、山田寺旧境内地の南半で集落、橘寺旧境内地の西半で集落が形成されており、島庄遺跡や石神・水落遺跡の南半、小原遺跡群、西橋遺跡でも形成されている。

一方、鎌倉時代には、石神遺跡北半では確実に水田・畑地となっていることがわかり、遺跡の確認されていない飛鳥宮も農地になっていたと考えられる。また、陵墓・墳墓の盗掘も頻繁に行われ、秩序が失われていた。

中世Ⅱ期（西暦1350年頃～1500年頃）：室町幕府（1338年頃）を画期とする

鎌倉幕府が滅亡し、後醍醐天皇の親政が始まった。しかし、足利尊氏が光明天皇を立て、後醍醐天皇は吉野へと移り、南北朝時代がはじまる。この時期、飛鳥地域は地理的に南朝側に結びつきやすく、越智氏の勢力下となる。越智氏の本拠は、高取町越智にある越智城であるが、その北側には貝吹山城を築城、さらに高取城も築いている。飛鳥地域にも中世山城が多く築かれ、国民小山氏の小山城を除いては、小規模な土豪層の城である。また、集落に関しては、中世Ⅰ期にあった石神・水落遺跡や小原遺跡、西橋遺跡の集落が廃絶し、水田となる。ここに集落の核が、現在の集落位置へと移ってきた。

中世Ⅲ期（西暦1500年頃～1600年頃）：1500年頃の伽藍焼失を画期とする

中世Ⅲ期は西暦1500年頃から始まる。この頃は越智氏の全盛期であるが、まだ動乱の時代でもあった。中世Ⅰ期で焼失した伽藍もすでに再建されているが、この頃に再び焼失する。川原寺は16世紀前半に中金堂と塔が焼失、橋寺は1497年に如来堂・太子堂を残して焼失、さらに1506年には多武峰の衆徒によって焼き討ちに合う。豊浦寺も1497年に越智軍と多武峰衆徒の合戦で焼失した。岡寺の塔は1472年に倒壊し、檜隈寺講堂もこの頃に廃絶している。このように、堂塔は再び、戦火によって失うことになった。そして、天昇11（1583）年に、筒井順慶に、越智氏は滅ぼされることによつて、中世飛鳥は終焉を迎える。

近世Ⅰ期（西暦1600年頃～1868年頃）：江戸幕府開設（1603年）頃を画期とする

豊臣秀吉は天正13（1585）年に、筒井定次（順慶の養子）に対して、郡山から伊賀上野へと移るよう命じた。そして秀長を郡山城に入城させ、大和守とした。これによって近世的新しい秩序を構築しようとした。慶長5（1600）年の関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康は豊臣方を一掃し、家康に従った武将に領地が与えられた。飛鳥を含む高市郡は本田俊政が統治の大名となる。この頃の遺跡は確認されていないが、江戸時代に入ると、寺社参詣や名所旧跡の見物など大和を訪れる人が増えるようになる。これらは『大和名所図絵』や『菅笠日記』などからも伺われる。当時、岡寺の門前として岡集落がにぎわいをみせており、辻では定期市も開かれていた。また、庄屋や旅籠も軒を連ねていたことがわかり、江戸時代末期の景観が、いまでも集落の所々に垣間見ることができる。

V. 総括—飛鳥地域における歴史的風土の形成過程—

飛鳥地域における景観の動向を遺跡と文献を中心に概観してきた。そして、飛鳥時代以降の歴史をみると、古代をⅠ～Ⅳ期、中世をⅠ～Ⅲ期へと区分が可能である。各時期の区分には画期を見いだすことができる。

古代Ⅰ期は694年から710年までの間で、藤原京遷都がエポック・ポイントとなる。宮殿が藤原へ遷ることにより、飛鳥は天皇不在になるが、宮殿と官衙等がなくなることを除いて景観上大きな違いをみられない。続く、**古代Ⅱ期**は710年から760年頃までの期間で、都はさらに遠く、奈良平城京へと遷る。宮殿の跡地や苑池や離宮は未だ維持管理が良好で、寺院の多くは修理をしながら伽藍を聳えている。そして条坊を廃して条里地割が飛鳥北部に施行される。しかし、この時期を境に、**古代Ⅲ期**（760年頃～900年頃）になると、各施設の管理は行き届かなくなる。特に、9世紀になると苑池や方形池は埋没が始まり、公的機関であった小治田宮も機能を停止

する。寺院は屋根の補修や修理をしながら、かろうじて寺観は保たれているが、大垣が廃絶するなど、境内の隅々までの管理は不良となる。そして、**古代Ⅳ期**（900年頃～1200年頃）には苑池や池が埋没し、坂田寺・山田寺の回廊などが倒壊する。このような状況は他の寺でも同様で荒廃が進んだ段階である。この状況を決定つけたのは次の**中世Ⅰ期**（1200年頃～1350年頃）で、1200年を前後する時期に多くの寺が落雷による焼失や倒壊にあっている。ここに至って、古代的景観は完全に失われたといってもよい。この頃、中世集落が散財的に展開するが、その多くは寺院の旧境内地に営まれる。**中世Ⅱ期**（1350年頃～1500年頃）には、越智氏の居城を中心に、飛鳥にも山城が多く造られる。また、この頃、前段階の集落はなくなり、水田となる。集落は現在の位置に移動する。**中世Ⅲ期**には、再建されていたいくつかの堂塔が再び焼失・廃絶する。ここで注目されるのは橘寺や豊浦寺などが焼き討ちにあったり、戦禍に巻き込まれて失われることである。時はまさに動乱の時代であり、これらをくぐり抜けることによるのみ、新しい時代を迎えることができる。**近世Ⅰ期**には絵図や紀行にもあるように、岡寺の門前町として岡集落がにぎわいをみせる。

これら各段階を表記するならば、古代Ⅰ期：宮の廃絶する段階、古代Ⅱ期：都が廃絶する段階、古代Ⅲ期：飛鳥が衰退していく段階、古代Ⅳ期：古代飛鳥の終焉段階、中世Ⅰ期：中世飛鳥の誕生する段階、中世Ⅱ期：中世飛鳥の形成と動乱の段階、中世Ⅲ期：中世飛鳥の終焉する段階、近世Ⅰ期：近世飛鳥の誕生する段階と位置づけられる。

この中でも、大きな画期は中世Ⅰ期と近世Ⅰ期に認められる。中世Ⅰ期は、それまでの古代的景観が中世的景観へと変化するターニング・ポイントであったことがわかる。そして、現在の基本的景観は中世的景観に直接的な原型を見いだすことができ、それは中世Ⅱ期の集落・里山景観といえよう。ただし、現在残る街並み・建物景観などはさらに新しい、近世期（江戸末から明治にかけて）の町並みではあるといえる。

このような歴史を経て、現在の飛鳥地域の景観は形成されたのである。今後はこの歴史的風土（文化財とそれを取り巻く1300年の景観）をいかに保存し、未来へと伝えるかが重要な政策課題となる。

本稿を成すにあたっては網干善教・北村憲彦・西光慎治・高橋幸治・竹田政則・林部均の各氏からのご教示・ご指導を得た。ここに記して感謝の意を表したい。

（平成18年11月30日稿了）

追記

平成18年7月29日、関西大学名誉教授であり、明日香村文化財顧問であった網干善教氏が亡くなられた。網干氏には筆者が明日香村に奉職して以来、直接・間接を問わず、多くのご教示・ご指導をいただいた。時には先生の見解とは異なる意見をしたこともあったが、これからも多くのことを学び、お教えいただきたかったのに残念である。本稿のテーマである歴史的風土の形成過程の解明は、言い換えれば、飛鳥の都市としての終焉を探ることでもあり、網干氏の論文「飛鳥京の終焉に関する一考察」を考古学的に検証したものにはほかならない。改めて氏の業績の大きさを痛感した次第である。本稿の内容に、網干氏の論をより進める点がひとつでもあるとすれば、幸いである。ご冥福をお祈りしたい。合掌……。

註

- 1) 飛鳥地域における条里地割については、その基準寸法と施工範囲について詳細に検討する必要がある。さらに既存施設の地割との対応関係や形成時期についても検討する必要がある。今後の課題である。

参考・引用文献

- 相原嘉之1993 「倭京の実像—飛鳥地域における京の成立過程—」『紀要 第6号』滋賀県文化財保護協会
- 相原嘉之1998 「飛鳥地域における古代道路体系の検討—都市空間復原に向けての基礎研究—」
『郵政考古紀要第25号(通巻34号)』大阪郵政考古学会
- 相原嘉之1999 a 「小墾田宮の土器—雷丘東方遺跡出土土器の再検討—」『瓦衣千年』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会
- 相原嘉之1999 b 「飛鳥の道路と宮殿・寺院・宅地—飛鳥の都市景観についての一視点—」
『条里制・古代都市研究 通巻15号』条里制・古代都市研究会
- 相原嘉之・光谷拓実2002 「小治田宮の井戸—井戸枠の年輪年代と出土土器—」『明日香村文化財調査研究紀要 第2号』
- 相原嘉之2003 「飛鳥浄御原宮の宮城—飛鳥地域における官衙配置とその構造—」『明日香村文化財調査研究紀要 第3号』
- 飛鳥資料館1983 『渡来人の寺—檜隈寺と坂田寺—』
- 飛鳥資料館1998 『それからの飛鳥』
- 明日香村教育委員会1977 『牽牛子塚古墳—環境整備事業に伴う事前発掘調査—』
- 明日香村教育委員会1988 『雷丘東方遺跡発掘調査概報』
- 明日香村教育委員会1991 『明日香村遺跡調査概報 平成2年度』
- 明日香村教育委員会1992 『明日香村遺跡調査概報 平成3年度』
- 明日香村教育委員会1993 『明日香村遺跡調査概報 平成4年度』
- 明日香村教育委員会1994 『明日香村遺跡調査概報 平成5年度』
- 明日香村教育委員会1996 『明日香村遺跡調査概報 平成6年度』
- 明日香村教育委員会1997 『明日香村遺跡調査概報 平成7年度』
- 明日香村教育委員会2000 『明日香村遺跡調査概報 平成10年度』
- 明日香村教育委員会2005 『明日香村遺跡調査概報 平成15年度』
- 明日香村教育委員会2006 a 『明日香村遺跡調査概報 平成16年度』
- 明日香村教育委員会2006 b 『酒船石遺跡発掘調査報告書—付、飛鳥東垣内遺跡・飛鳥宮ノ下遺跡—』
- 阿部義平1997 「倭京の都市指標—日本列島における都城形成—」『国立歴史民俗博物館研究報告 第74集』
- 網干善教1966 「奈良朝火葬墓の一考察」『日本歴史考古学論叢』日本歴史考古学会
- 網干善教1974 「中世大和における伽藍復興に関する一考察」『恵谷先生古稀記念 浄土教の思想と文化』
- 網干善教1977 「吳原寺(竹林寺)とその遺跡・遺物」『仏教史学論集』二葉憲香博士還暦記念会
- 網干善教1980 「飛鳥と仏教文化」『古代の飛鳥』学生社
- 網干善教1984 「近世紀行文にみえる飛鳥の遺跡」『講座飛鳥の歴史と文学④』駈々堂出版
- 網干善教2004 「飛鳥京の終焉に関する一考察」『佛教と人間社会の研究—朝枝善照博士還暦記念論文集—』永田文昌堂
- 泉谷康夫1974 「飛鳥の荘園」『明日香村史 上巻』明日香村史刊行会
- 井上和人1994 『条里制研究の一視点—奈良盆地における条里制地割施行年代について—』静邨詩社
- 岩屋山古墳環境整備委員会1980 『奈良県高市郡明日香村越 岩屋山古墳—史跡環境整備事業にともなう事前調査概要—』明日香村教育委員会
- 大脇 潔1989 『日本の古代美術14 飛鳥の寺』保育社
- 大脇 潔1997 「蘇我氏の氏寺からみたその本拠」『堅田直先生古希記念論文集』真陽社
- 小澤 毅1988 「伝承板蓋宮跡の発掘と飛鳥の諸宮」『橿原考古学研究所論集 第九』吉川弘文館

- 小澤 毅1995 「小墾田宮・飛鳥宮・嶋宮一七世紀の飛鳥地域における宮都空間の形成一」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所
- 小澤 毅2002 「飛鳥の都」『日本の時代史3 倭国から日本へ』吉川弘文館
- 橿原考古学研究所1972 「飛鳥京跡一昭和46年度発掘調査概報一」奈良県教育委員会
- 橿原考古学研究所1980 「大和国条里復原図」
- 橿原考古学研究所1983 「奈良県遺跡調査概報 1982年度」
- 橿原考古学研究所1990 「奈良県遺跡調査概報 1989年度」
- 橿原考古学研究所1995 「奈良県遺跡調査概報 1994年度」
- 橿原考古学研究所1998 「奈良県遺跡調査概報 1997年度」
- 橿原考古学研究所1999 「橘寺」
- 橿原考古学研究所2000 「奈良県遺跡調査概報 1999年度」
- 橿原考古学研究所2001 「奈良県遺跡調査概報 2000年度」
- 橿原考古学研究所2002 a 「奈良県遺跡調査概報 2001年度」
- 橿原考古学研究所2002 b 「飛鳥京跡苑池遺構調査概報」
- 橿原考古学研究所2003 「奈良県遺跡調査概報 2002年度」
- 橿原市千塚資料館1991 「平成2年度 埋蔵文化財発掘調査速報」
- 橿原市千塚資料館1994 「かしの歴史をさぐる2 平成5年度埋蔵文化財発掘調査速報」
- 亀田 博1995 「明日香の近世の石造物」『季刊明日香風 第56号』飛鳥保存財団
- 亀田 博2001 「橘寺の沿革伽藍」『堅田直先生古希記念論文集』堅田直先生古希記念論文集刊行会
- 河上邦彦1999 「東明神古墳の研究」橿原考古学研究所
- 川越俊一2000 「藤原京条坊年代考一出土土器から見た存続期間一」『研究論集X I』奈良国立文化財研究所
- 木下正史1992 「藤原宮その後」『季刊明日香風 第41号』飛鳥保存財団
- 黒崎 直1980 「近畿における8・9世紀の墳墓」『研究論集VI』奈良国立文化財研究所
- 佐川正敏・西川雄大2000 「奥山廃寺の創建瓦」『古代瓦研究Ⅰ一飛鳥寺の創建から百濟大寺の成立まで一』奈良国立文化財研究所
- 高橋誠一2006 「歴史地理学よりみた明日香村」『続明日香村史』明日香村
- 田中 聡2001 「古代陵墓関連年表」『別冊歴史読本 歴史検証天皇陵』新人物往来社
- 田村吉永1960 「百濟大寺と高市大寺一大安寺成立に関する一見解一」『南都仏教 第8号』南都仏教会
- 谷山正定2006 「第一章 明日香村誕生前史 第二節 近世の飛鳥」『続明日香村史 中巻』明日香村
- 永島福太郎1974 「中世」『明日香村史 上巻』明日香村史刊行会
- 奈良県教育委員会1972 「飛鳥京跡一昭和46年度発掘調査概報一」
- 奈良県教育委員会1974 「嶋宮伝承地一昭和46～48年度発掘調査概報一」
- 奈良国立文化財研究所1958 「飛鳥寺発掘調査報告」
- 奈良国立文化財研究所1960 「川原寺発掘調査報告」
- 奈良国立文化財研究所1973 「飛鳥・藤原宮発掘調査概報3」
- 奈良国立文化財研究所1974 「飛鳥・藤原宮発掘調査概報4」
- 奈良国立文化財研究所1976 「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ一小墾田宮推定地・藤原宮の調査一」
- 奈良国立文化財研究所1978 「飛鳥・藤原宮発掘調査概報8」
- 奈良国立文化財研究所1980 「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ一藤原宮西辺地区・内裏東外郭の調査一」
- 奈良国立文化財研究所1981 「飛鳥・藤原宮発掘調査概報11」
- 奈良国立文化財研究所1986 「飛鳥・藤原宮発掘調査概報16」
- 奈良国立文化財研究所1990 「飛鳥・藤原宮発掘調査概報20」

- 奈良国立文化財研究所1993 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報23』
- 奈良国立文化財研究所1994 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報24』
- 奈良国立文化財研究所1995 a 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ－飛鳥水落遺跡の調査－』
- 奈良国立文化財研究所1995 b 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報25』
- 奈良国立文化財研究所1997 『奈良国立文化財研究所年報1997－Ⅱ』
- 奈良国立文化財研究所1998 『奈良国立文化財研究所年報1998－Ⅱ』
- 奈良国立文化財研究所1999 『奈良国立文化財研究所年報1999－Ⅱ』
- 奈良国立文化財研究所2000 『奈良国立文化財研究所年報2000－Ⅱ』
- 奈良文化財研究所2002 『山田寺発掘調査報告』
- 奈良文化財研究所2004 『川原寺寺域北限の調査』
- 奈良文化財研究所2006 a 『奈良文化財研究所紀要2006』
- 奈良文化財研究所2006 b 『高松塚古墳の調査－国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策検討のための平成16年度発掘調査報告－』
- 西川雄大2005 「飛鳥の坂田寺式軒丸瓦」『古代瓦研究Ⅱ－山田寺式軒丸瓦の成立と展開－』奈良文化財研究所
- 西口壽生2002 「奈良時代の坂田寺」『季刊明日香風 第84号』飛鳥保存財団
- 花谷 浩1999 「飛鳥池工房の発掘調査成果とその意義」『日本考古学 第8号』日本考古学協会
- 花谷 浩2000 a 「京内廿四寺について」『研究論集XⅠ』奈良国立文化財研究所
- 花谷 浩2000 b 「飛鳥寺・豊浦寺の創建瓦」『古代瓦研究Ⅰ－飛鳥寺の創建から百濟大寺の成立まで－』奈良国立文化財研究所
- 花谷 浩2003 「飛鳥寺院の奈良時代」『季刊明日香風 第86号』飛鳥保存財団
- 林部 均2001 『古代宮都形成過程の研究』青木書店
- 林部 均1998 「伝承飛鳥板蓋宮跡出土土器の再検討」『橿原考古学研究所論集 第十三』吉川弘文館
- 林部 均1999 「飛鳥浄御原宮その後－古代における宮都廃絶についての一様相－」『考古学研究 第45巻第4号』考古学研究会
- 林部 均2006 「『飛鳥宮』の廃絶－飛鳥京跡内郭中樞の調査から－」『季刊明日香風 第98号』飛鳥保存財団
- 平井良朋1974 「近世」『明日香村史 上巻』明日香村史刊行会
- 藤岡英礼2001 「大和国における越智氏勢力圏の城館構成－畿内国人勢力圏の山城を中心に－」『大和高取城』城郭談話会
- 村田修三1987 『日本城郭大系』新人物往来社
- 安田龍太郎2005 a 「平城遷都後の藤原宮」『季刊明日香風 第93号』飛鳥保存財団
- 安田龍太郎2005 b 「藤原宮周辺の中世方形区画」『飛鳥文化財論叢－納谷守幸氏追悼論文集－』納谷守幸氏追悼論文集刊行会
- 吉川真司2001 「飛鳥池遺跡と飛鳥寺・大原第」『飛鳥池遺跡と亀形石』ケイ・アイ・メディア
- 吉川真司2006 「第一章 明日香村誕生前史 第一節 中世の飛鳥」『続明日香村史 中巻』明日香村史刊行会
- 和田 萃1988 「飛鳥のチマタ」『橿原考古学研究所論集 第十』吉川弘文館
- 和田 萃2001 「奈良時代の飛鳥の苑池」『季刊明日香風 第78号』飛鳥保存財団